倉敷埋蔵文化財センター年報 3

ー平成7(1995)年度ー

倉敷埋蔵文化財センター

1996.11

序

倉敷埋蔵文化財センターは、開館以来3年が経過し、倉敷市における埋蔵文化財保護の拠点施設としての役割にますます期待が高まっています。

こうした中、当センターは調査研究のみならず市民の生涯学習活動を援助,推進するため、様々なテーマや企画を設定し、市民に親しまれる施設として皆様のご期待に応えていきたいと願っております。

この年報は、平成7年度に当センターが実施いたしました発掘調査業務ならびに普及事業等についての概要をまとめたものであります。

発掘調査業務につきましては、地域開発と埋蔵文化財の保護保存との調和を図りつつ、事業を円滑に進めていくことが重要であり、その基礎資料として本年度も引き続き積極的に確認調査や分布調査を実施いたしており、早期に遺跡の保護対策が講じられるよう努力いたしております。

また当センターの重要な業務の柱のひとつである普及事業につきましては、『玻璃(はり)古代吉備と世界のガラス』と題した古代のガラスをテーマにした企画展の開催をはじめとして各種講座を幅広く実施いたしており、多くの市民のご参加をいただきました。

この小冊子がセンターはもとより埋蔵文化財に対する市民の一層の理解を深めるために役立つものであれば幸いです。

最後になりましたが、調査をはじめ講座等センターの運営にあたり、ご指導ご協力を賜りました関係の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも市民各位のより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年11月30日

倉敷埋蔵文化財センター
館長　荻野延治

例　　言

1．本書は、倉敷埋蔵文化財センターが1995年度に行った埋蔵文化財保護行政の概要についてまとめたものである。
2．発掘調査は、倉敷埋蔵文化財センター職員福本明・鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二・中野倫太郎・片岡弘至が担当した。
3．本書の執筆は各担当者が分担して行い、それぞれ文末に文責を記した。全体編集は、鍵谷が行った。
4．出土遺物の整理は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては、内田智美・木曽敏江・藤田朱美・宮地かをりの協力を得た。
5．調査地点位置図で使用した地形図は、倉敷市発行の50,000分の1の都市計画図を縮小したものであり、その他のものは、倉敷市発行の都市計画図を複製または縮小したものである。
6．本書に関する実測図・写真・遺物等は、全て倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

目　次

Ⅰ　1995年度事業の概要 1

Ⅱ　普及・啓発事業 3
1．企画展「玻璃　古代吉備と世界のガラス」 3
2．企画展関連行事 3
3．一般講座 5
4．王子が岳南麓遺跡発掘調査報告書刊行記念行事 9
5．ライフパークの集い 10
6．そのほか 11
7．成果と今後の課題 12

Ⅲ　調査事業 14
北面丸山貝塚群第4群発掘調査報告 17
酒津－水江遺跡確認調査報告 18
黒崎貝塚確認調査報告 19
下津井城跡確認調査報告 20
採石工事に伴う遺跡確認調査報告 21
新熊野山遺跡確認調査報告 23
上東遺跡確認調査報告 24
流通センター内遺跡確認調査報告 25
酒津－水江遺跡確認調査報告 26

Ⅳ　資料紹介 27
倉敷市内の有茎尖頭器 27
玉島富ジョオゴナル遺跡出土の土器 29
経寺山2号墳出土の須恵器（補遺） 37

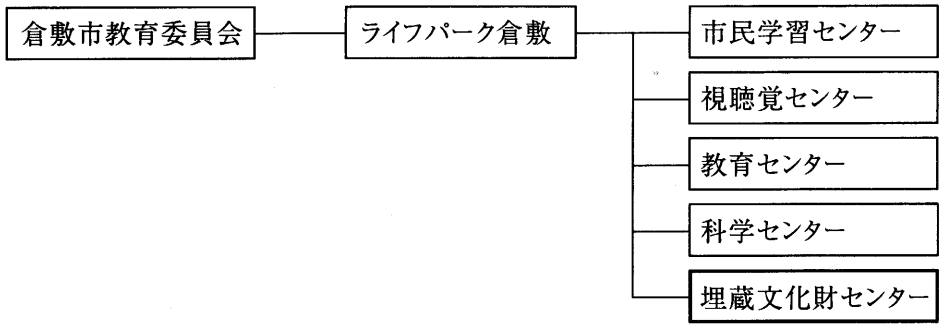
Ⅴ　寄贈図書一覧 40

Ⅵ　付　編
倉敷埋蔵文化財センター情報誌「ほるほる」 51

Ⅰ　1995年度事業の概要

埋蔵文化財センターは、生涯学習施設であるライフパーク倉敷の中の一施設として、市域内の埋蔵文化財に係る業務を一括して担当している。1995年度における埋蔵文化財センターの組織および人員は下記のとおりとなっている。

倉敷埋蔵文化財センター機構図



ライフパーク倉敷	所長	今田　昌男	(1995年9月まで)
	所長	三宅　正廣	(1995年10月から)
埋蔵文化財センター	館長	三宅　正廣	(ライフパーク倉敷所長兼務)
〃	館長補佐	武田　俊宏	
〃	主　任	福本　　明	
〃	学芸員	鍵谷　守秀	(科学センター学芸員兼務)
〃	〃	小野　雅明	
〃	〃	綾野　早苗	
〃	〃	藤原　好二	(文化課学芸員兼務)
〃	〃	中野倫太郎	
〃	〃	片岡　弘至	
〃	嘱　託	内田　智美	
〃	臨時職員	藤田　朱美	
〃	〃	木曽　敏江	
〃	〃	宮地　かをり	(職名等は1996年3月31日現在)

平成7年度　埋蔵文化財センター運営協議会

会　長	間壁　忠彦	(学識経験者)
副会長	小野　一臣	(　〃　)
委　員	有和　克己	(小学校長会県副会長)
〃	鎌田　　收	(中学校長会県副会長)
〃	立脇　兌昶	(高等学校校長会)
〃	古谷野寿郎	(学識経験者)
〃	池田三重子	(　〃　)
〃	宮口　公子	(　〃　)

埋蔵文化財センターが行う事業のうち、おもに普及啓発部門について協議をおこなう「倉敷埋蔵文化財センター協議会」は7月14日に開催され、センター主催の各種講座・講演会・企画展などについて貴重な意見をいただいた。また当協議会は9月29日～9月30日にかけて福岡市方面の先進施設の視察を行っている。

1995年度の調査業務は、発掘調査1件、確認調査9件、立会調査20件を実施しており、1,000㎡を超える開発事業についての開発事前協議は、161件となっている。このうち発掘調査を実施した北面丸山貝塚は墓地造成に伴うもので、小規模な調査ながら中世貝塚の一端が明らかにされた。その他の調査は、いずれも開発に伴う事前の遺跡存在状況確認調査で、いずれも本調査を行うまでには至っていない。

また、文化財分布図の改訂作業に伴う分布調査は、前年度に継続して玉島・児島地区を中心に実施しており、玉島地区については概ね調査を終了している。なお分布調査により作成された遺跡台帳および過去の調査実績等についても、地図情報とともにパソコンに入力し、一括して情報管理を行う作業も並行して進めている。

普及事業については、本書第Ⅱ章に詳述されているので参照していただきたい。このうち1995年度の企画展は、『玻璃 古代吉備と世界のガラス』をテーマに、4月18日から6月11日にかけて開催し、あわせて関連の講演会・コンサートも実施した。その他埋蔵文化財センター主催講座として8講座（14回）を開催しているが、各講座とも募集定員を上回る応募があり、好評を博している。

こうした展示・講座等を含めた本年度の利用者数については下表のとおりで、開館日数295日に対し、入館者数20,140人となっており、わずかながら前年度実績を上回っている。このうち企画展開催中の利用者は6,879人となっており、利用者数の上からもその成果をうかがうことができる。

1995年度利用者数集計表

月		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合　計
開館日数		25	24	26	26	27	24	25	24	22	22	24	26	295（日）
入館者数	一般	1,694	1,969	1,015	777	906	628	996	878	267	414	428	844	10,816（人）
	児童生徒	900	2,166	654	697	1,144	668	1,142	419	368	215	248	703	9,324（人）
	合計	2,549	4,135	1,669	1,474	2,050	1,296	2,138	1,297	635	629	676	1,547	20,140（人）

Ⅱ　普及・啓発事業

1．企画展「玻璃　古代吉備と世界のガラス」

会　　期　4月18日(火)～6月11日(日)
会　　場　埋蔵文化財センター「展示室」
対　　象　一般
入 場 者　6,879人

この企画展は倉敷市立美術館の特別展「世界現代ガラス展」、倉敷市立自然史博物館の企画展とテーマをそろえ、それぞれの切り口からガラスを紹介しようという枠組みのもとで計画された。吉備地域から出土したガラス製品と関連遺物を中心に、羽原明徳氏が遺したトンボ玉コレクション、古代ガラスの現代的再生を試みるガラス工芸家松島巌氏の作品を展示し、古代ガラスの世界をいろいろな角度から紹介した。

美的感覚にうったえる親しみやすい展示品であったためか、多くの人達に見学してもらうことができた。会場からは、美しいガラスに魅せられた人達のため息も聞こえて来た。前述の三館の協力のもとに、この展示に合わせて、様々な関連企画を実施することができた。

2．企画展関連行事

1）講演会

講　　師　由水常雄
日　　時　4月22日(土)
会　　場　ライフパーク倉敷「大ホール」
対　　象　一般
入 場 者　251人

ガラスに興味を持つ人々が今回の展示をより深く楽しみ、学ぶ事ができるように、東京ガラス工芸研究所所長の由水常雄氏にご講演をいただいた。

数千年の昔、古代人の手により自然の中からガラスが生み出されたこと。そして、現代の作家達へと至るガラス長い歴史。弥生時代の遺跡から正倉院、ガレそして現代作家の工房まで。美しいガラスたちのスライドを駆使した由水先生のお話は、瞬く間に数千年を駆け巡り、我々はガラスをめぐる知的冒険に我を忘れた。

考古学が一般的にあつかう時代だけではなく、現代の我々に身近なところまでお話しいただいたのが親しみやすかったのだろう、長時間の講演だったが、回収されたアンケートの中には、まだゆっくりとお話がうかがいたかったという意見も多かった。　（中野）

2）コンサート「玻璃の音・土の音」

演　　奏　田村　洋
日　　時　4月22日(土)
会　　場　ライフパーク倉敷「大ホール」
対　　象　一般
入 場 者　251人

楽しみながら古代とガラスの魅力に触れてもらおうとコンサートを企画した。

弥生時代の土笛をはじめとするさまざまな笛を演奏される山口県在住の作曲家田村洋氏に、松島巌氏作のガラス笛の演奏をお願いした。

どこかぬくもりのある土笛の音と、さわやかなガラス笛の音は、聴く者を古代の世界へと誘い、楽しい歴史旅行の時間が流れた。磬笛や民俗楽器の演奏も、普段聴く事のできない珍しい音であり、大変興味深い演奏会だった。

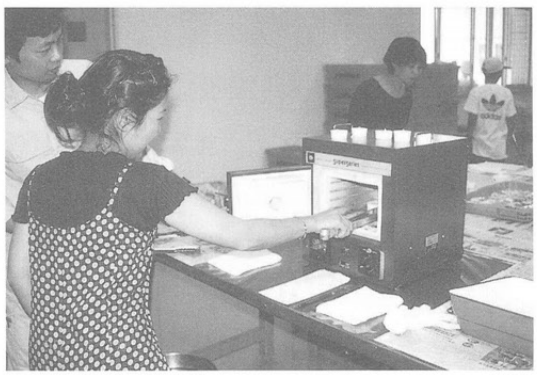
3）講座「ガラスで勾玉をつくってみよう」

日　　時　6月10日(土)
会　　場　埋蔵文化財センター「遺物整理室」
対　　象　一般
受 講 者　18人

弥生時代の遺跡から勾玉の鋳型がいくつか見つかっている。本物は粘土製なのだが、この講座では耐火石膏の鋳型にガラス片を入れ、電気炉で融かして勾玉をつくった。

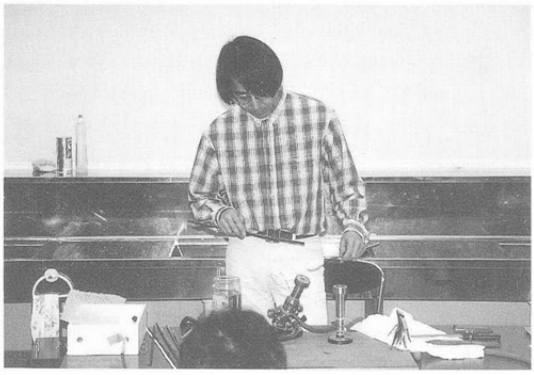
受講生には自分達の好みの色のガラスを鋳型に入れて、勾玉ができるのを待つ間、企画展の展示に関するワークシートに挑戦してもらった。

この講座については再度の開催をリクエストする声も多い。こうした声にも応えていきたい。(中野)



3．一般講座

1）古代ガラスの博物誌



講　　師　松島巌
　　高橋進一
日　　時　4月23日(日)
会　　場　埋蔵文化財センター「遺物整理室」
対　　象　一般
受 講 者　31人

実際に発掘調査を手掛け、古代の玉造りについて研究している高橋進一氏に、古代のガラス玉について、豊富な出土例から製作技法までわかりやすくお話いただいた。また、公開製作では、コア・ガラスと呼ばれる古代エジプトなどで行われた小さな容器を作る技法を復元し、製作をしているガラス工芸作家による実際の製作の様子を見学した。

2）古代ガラスの博物誌Ⅱ

～トンボ玉と吹きガラス～

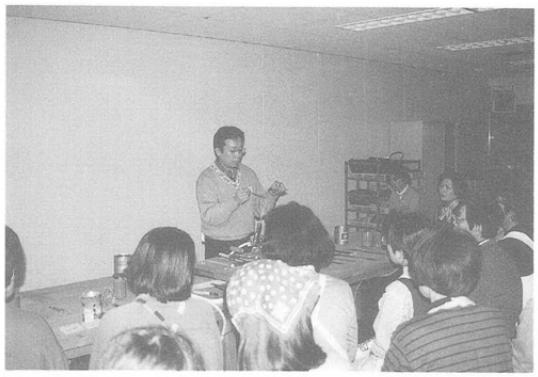
講　　師　磯谷晴弘
　　迫田岳臣
日　　時　11月11日(土)・12日(日)
会　　場　埋蔵文化財センター
　　倉敷芸術科学大学
対　　象　一般
受 講 者　37人(延べ人数)

古代ガラスの歴史の中でも、最も古い技法のひとつ玉作りと古代ガラスの世界に大きな生産革命をもたらした吹きガラスの発見を、工房見学と制作体験により学ぶ講座である。倉敷芸術科学大学のガラス工房で、正倉院に伝世するペルシャの紺瑠璃杯を実際に制作を見学し、その制作技術について学んだ。また、受講生にはバーナーでガラス棒をとかし、トンボ玉制作を体験していただいた。　(綾野)

2）古代ガラスの博物誌Ⅲ

～金層トンボ玉の歴史と技法～

講　　師　迫田岳臣
日　　時　3月16日(土)・30日(土)
会　　場　ライフパーク倉敷「クラフト室」
対　　象　一般
受 講 者　63人(延べ人数)



岡山県の大佐町円通寺古墳や奈良県の新沢千塚111号墳から出土した金層トンボ玉を例に、巻玉と管引きの二種類の技法について、あらかじめ講師に制作していただき、これを撮影したビデオによる技法解説を行った。その後、受講生それぞれが、バーナーを使ってガラス棒を融かし、金層トンボ玉などの制作を行った。「古代ガラスの博物誌」シリーズには、毎回、多数の申し込みをいただくが、今回は定員の7倍を越える申し込みがあったので、クラスを増設した。それでも半数以上の方々に受講していただけなかった。

このシリーズは、春の企画展を機にスタートしたもので、考古資料をもとにその歴史や制作技法について学び、実際の制作を体験する講座である。道具の違いはあるが、炎にガラスが融ける様子や制作の難しさ、あるいは、完成の喜びを通して古代の生産技術の素晴らしさを体験していただいている。実際の制作の感動をもって古代の生活を見直し、考古学へのやさしいアプローチとするもので、20代から高齢の方まで、幅広い層に人気の講座である。アンケートでも大半の受講生が継続を希望しているほか、「古代の人々の工夫と努力がしのばれる」、「古代の技術や美意識を実感するには、写真や図版だけでなく、制作や実物を身近に観察できる機会を増やしてほしい」などの要望が寄せられている。　（綾野）

4）夏休み親子考古学教室

日　　時　7月26日(水)・27日(木)
会　　場　埋蔵文化財センター
　　市立少年自然の家
対　　象　小学校高学年と保護者
受 講 者　24人

夏休み中の子供達に楽しんで考古学の世界に触れてもらおうと、本年度も「舞いぎり」つくりと火おこし、土器による古代料理作りを行った。

３年目にもなると、指導する側は準備等にも慣れ、滞りなくプログラムを消化出来るようになっている。

現在のものに加える新規のプログラムを開発すること、減少傾向にある参加者の増員をはかることが今後の課題となるだろう。

5）親子ふれあい隊

～弥生時代の土笛をつくろう～

日　　時　7月9日(日)・23日(日)
会　　場　埋蔵文化財センター「遺物整理室」
対　　象　小学生と保護者
受 講 者　32人(延べ人数)

ライフパーク倉敷の５館共同行事、「親子ふれあい隊」の埋蔵文化財センター担当分である。この「土笛づくり」も回を重ねるに従い、講座指導のできる職員が増え、確実に軌道に乗りつつある。その後この土笛作りについては、館外への出張指導なども行われはじめている。普及活動の館外化のひとつのモデル・ケースになっていくのだろう。また、こうした指導が楽で受講者の反応が良い講座の新規開発を忘れてはならないと思う。

（中野）

6）古墳時代の吉備

講　　師　第１日　中野倫太郎
「古墳時代の基礎知識」
第２日　葛原克人
「吉備の古墳(1)前半期古墳」
第３日　村上幸雄
「吉備の古墳(2)後半期古墳」
日　　時　11月10日・17日・24日(金)
会　　場　ライフパーク倉敷「視聴覚ホール」
対　　象　一般
受 講 者　46人

昨年度までの「考古学入門講座」に続く中級編の講座である。

第１日目には、古墳時代に至るまで埋葬の歴史を概観し、現在古墳がどのように研究され、またどのように定義されているか等、概説的な話とあわせて、用語解説などを行った。講座の導入部という性格を前面に出した、第２回以降の理解を助けるための基礎知識編である。第２日目は葛原克人氏により、前期古墳から読み取った古代吉備の様子をお話いただいた。巨大古墳の見方、巨大古墳の系譜関係、そこから見てとれる政治的中心の変遷等。その勢いのある話しぶりに皆引込まれ、あっという間の2時間だった。

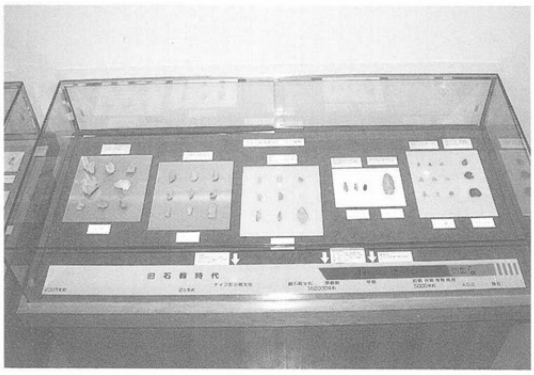
第３日目は村上幸雄氏に後期古墳をテーマにお話していただいた。ご自身が調査に当たった巨石古墳の実例、またそこから読み取れる古代吉備の姿、様々な話題が当時の様子を浮き彫りにしていった。軽妙な語り口と実例に裏付けられた楽しいお話だった。

このような各論的な講座はアンケート等で希望も多いので、今後も行っていくだろう。　　（中野）

４．王子が岳南麓遺跡発掘調査報告書刊行記念行事

平成５年１月から３月にかけて発掘調査を行った王子が岳南麓遺跡の報告書が完成したことから、記念行事として小企画展と講座を実施した。報告書は、その性格上どちらかと言えば専門家向けのものであるため、この企画は一般の方々にも王子が岳南麓遺跡をとおして旧石器時代の瀬戸内の様子を知ってもらおうという趣旨で行った。

１）企画展「王子が岳南麓遺跡発掘調査成果展」



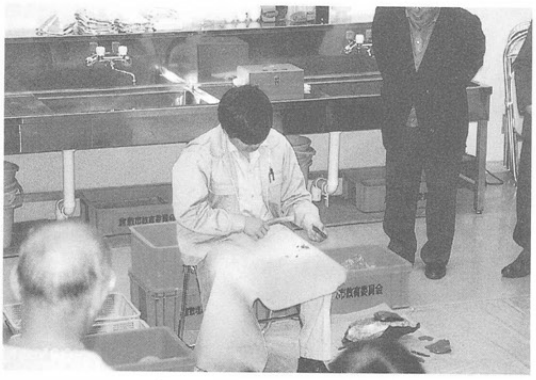
会　　期　1月17日（水）～3月31日（日）
会　　場　埋蔵文化財センター「展示室」
対　　象　一般
入 場 者　2,660名

移動ケース２つに王子が岳南麓遺跡出土資料と市内の関連遺跡出土資料をそれぞれ展示した。また、市内出土の有茎尖頭器の大半を一度に展示することができた。発掘現場の様子を写したパネルの展示、四国国分台で採集したサヌカイトの実物をさわれるコーナー等を設け、堅苦しくならないよう配慮した。

２）講座「瀬戸内の旧石器」

講　　師　平井勝・藤原好二
日　　時　1月28日（日）
会　　場　埋蔵文化財センター「遺物整理室」
対　　象　一般
受 講 者　26名

この講座では岡山県教育委員会の平井勝氏にお話していただいた。人類の誕生からはじまり、旧石器時代には瀬戸内海はなく広大な平原がひろがっていたこと、石器の形からみた人々の交流など広範囲な内容を解りやすく説明していただいた。



最後に当センター学芸員が、旧石器時代と同じ方法による石器の製作実演を行った。鹿の角で石を割る場面や、出来上がった石器で肉を切る時には受講生から歓声があがった。作業後の剥片を持って帰る人も多く、こちらも好評だった。　（藤原）

5．ライフパークの集い

1）不思議楽器を鳴らしてみようPart Ⅲ

日　　時　8月20日(日)
会　　場　埋蔵文化財センター
対　　象　一般
入 場 者　341人

ライフパーク倉敷全館あげてのイベント「ライフパークの集い」にあわせて行った。今回で２回目になる。

復元した古代楽器をメインに、民俗楽器や創作楽器に触れ、実際に音を出してもらい、考古学と考古遺物を身近に感じてもらおうという趣旨で始まった企画である。

昨年度制作した縄文時代の土器太鼓、弥生時代の土笛、古墳時代の琴などに加えて、若干の楽器を造り足した。とはいっても、その詳細が考古資料によって明らかになっている楽器の数は少なく、昨年制作分以上の古代楽器を造ることは困難であった。そのため、創作楽器や廃物利用の音具を制作した。

埋蔵文化財センターの展示としてこのようなものが妥当かどうかは賛否のあるところだと思う。

が、実際に企画に参加した小学生やそれよりも幼い子供達と対話するとき、難解な考古学用語はほとんど無力である。それよりは、いくつもの楽しい楽器をさわる中で、そのひとつとして「これは大昔の人の楽器だよ。」と話したほうが、考古資料を無理なくより血の通ったものとして感じてもらえるのではないかと思う。事実、おおはしゃぎの子供達と一緒になって大人達も笑顔を浮かべていたのだから。考古資料の展示だけではこうはいかないのではないだろうか。

（中野）

2）夏休み親子考古学教室写真展

日　　時　8月20日(日)～31日(木)
会　　場　埋蔵文化財センター「展示室」

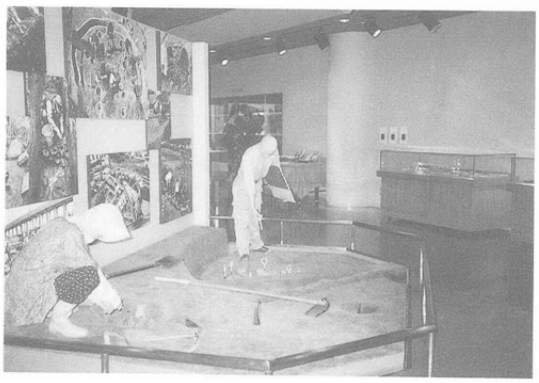
「ライフパークの集い」にあわせて、夏休み親子考古学教室の様子の写真展を行っている。これはこの教室の紹介という意味合いも持っているのだが、教室参加者数の年々の減少を考えると、さらに効果的なアピールの方法を開発する必要があるのではないかと思われる。

6．そのほか

以上の企画展や講座の他にも、普及を念頭においた活動がいくつか行われている。その現状を以下に紹介しておく。

1）常設展示

常設展示の大きな変更は行われていない。「王子が岳南麓遺跡発掘調査成果展」の後、当センター所蔵資料分を継続して展示しているのがもっとも目立った変更点だろうか。展示室の一角を使用して活動していた子供達の質問を受けるコーナー「おしえて!おしえて!」は、講座・企画展等の増加による担当者の多忙により停滞気味である。



2）「ほるほる」の刊行

埋蔵文化財センターの情報誌として不定期ながらも刊行を続けて来た「ほるほる」であるが、本年度は「王子が岳南麓遺跡発掘調査成果展」の展示案内の形でしか刊行できなかった。多忙を言い訳にしても、刊行できなかった事実は如何ともし難い。さいわい次号をリクエストする人達にも会えたし、こうしたものは出し続けていくことが大切であるとの指摘もいただいている。ページ数を減らしてでも刊行を維持していきたい。

（中野）

7．成果と今後の課題

自らが時間の流れのどこにいて、どちらへ向かって歩むべきなのか、歴史はそれを教えてくれるのではなかったか。

しかし、歴史に関る仕事をしている者達がうっかりとしている間に、人々の歴史認識は非科学的、幻想的な偽物を礼拝する危険な急斜面を転げ落ちているのではないか。また、自分の力で考え歴史認識を確立する科学的方法さえも人々の頭の中からは失われれつつあるのではないか。そんな気がしてならない。

個々の例をあれこれと揚げる事はこの文の趣旨とは離れるので避けるが、陰謀史観だの、超古代史だのが、大きな社会問題と関連して取り沙汰されることを見ても、これはそんなに見当違いの見解ではないと思う。これをそのまま放置しておけば、私達の歴史認識は歪み続け、いずれ大きなツケがまわってくるのではないか、とも。

そうした中で、私達学芸員は普及活動を行っている。しかし、その責は未だ十分に果たされてはいない。ぼんやりとしている暇などない。そのことを忘れてはならない。

さて、開館から２年間、当センターの普及事業はさまざまな課題を生みながらも、一定の成果をあげて来たものと思う。開館３年目にあたる平成７年度も、センターの存在のアピールという目的のもとに、前年度までの成果を踏まえつつ、さらに新しい試みを加えていくよう心掛けて事業を展開していった。

まず、従来の流れの上で得られた大きな収穫としては、他施設との連繋の本格化をあげることができるだろう。開館記念の企画展から始まったこの方向の模索は、今年度の企画展「玻璃-古代吉備と世界のガラス」で大きな成果をもたらした。そして、その後もこの経験は生かされ、大学、自然史博物館、公民館などと連繋した催物が現在も企画・開催され続けている。

また、普及担当の新らしいスタッフを迎え、講座が質、量ともに充実し、その参加者数が増大したこともまた、この年の成果として特筆されるべきだろう。企画展の関連企画として始まった講座「古代ガラスの博物誌」は好評を博し、さらにその後も回を重ねている。。この一連の講座はどれも募集定員に数倍する多数の申し込みをいただいており、このシリーズは今後も継続して行われることが決定している。このことからは、専門家の視点にかたよった企画の愚、また市民の需要をくみとって講座のテーマを選択していくことの大切さをあらためて認識させられた。

講座の度のアンケートでは、発掘調査の成果速報展、講義形式の講座など、一般的に多く見られるスタイルでの企画も多く希望されていた。開館以降、埋蔵文化財センターの企画としてはやや奇抜なものがつづいた中で、こうしたオーソドックスなスタイルの展示や講座を改めて行ったことは、逆説的ではあるが、本年度の新しい試みということができるだろう。実施に当たっては、今まで重視して来た受講者の参加と遊戯性を押さえつつも、堅苦しくて受講者に理解不能のものにならないように心掛けた。講座の第１回目に基礎知識と背景の大まかな紹介だけの講義を行う、講義の後に実演を行う等の試みがその一端である。そこではこれまでの参加型講座の経験

で蓄積されたものが生かされたはずである。

こうして様々な企画を実施していく上で、まったく何の問題も生まれなかったわけではない。そのいくつかに触れておくことにしよう。

まず、他施設との連繋を行う上で問題となったのは、専門家性に閉じこもりがちで、他者、他分野との交流が少ない考古学系学芸員が、どのように外部と接触していくかということである。一般的に流通する歴史認識と専門家の認識との間のギャップ、同業の考古学関係者以外の人達との交渉に不慣れなことで生じる齟齬、本来その目的や運営体制等の条件を異にする組織相互の調整の難しさ等、様々な問題に出会った。

また、企画の立案から実施に至るまで、限られた日程と人員であたらなければならなかったため、職員間の機能分化が極端に進行してしまったことも現在残されている大きな問題である。事業実施の間に個人に蓄積された経験、知識からなる実践的な「技術」は、本来、他の職員からの評価・批判を経た後に皆に共有化されるべきである。しかし、職員の機能分化の結果、現在までのところ当センターでそれは十分に果たされていない。人事異動等の事態による「技術」途絶の可能性が常にある以上、経験第一主義、旧来の徒弟社会的な伝授法に代わる速やかな「技術」の伝達方法を考えださねばならないのではないかと思っている。

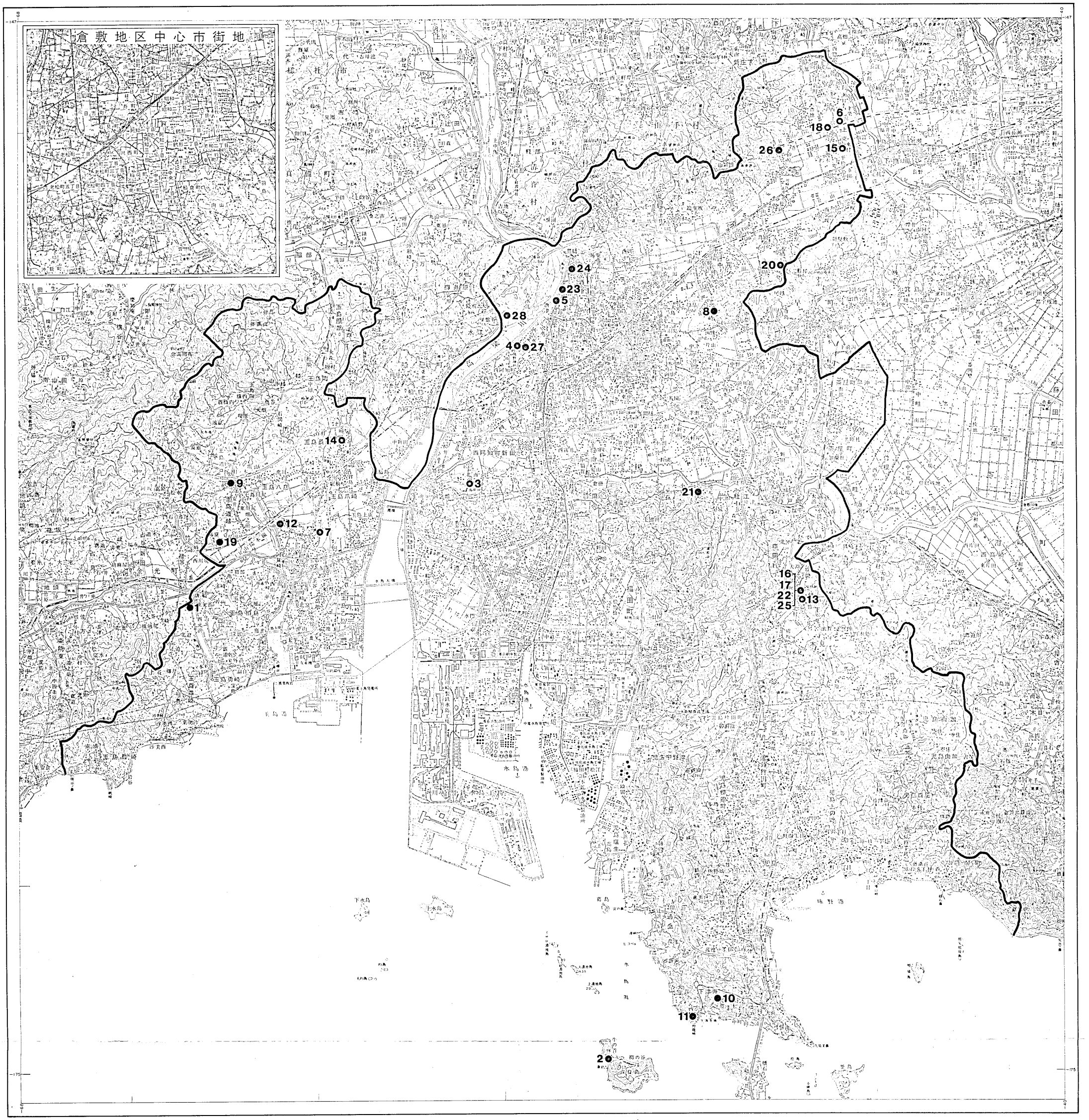
紙幅の関係でこうした問題点のそれぞれについて詳述はできないが、今後もこうした問題解決へ向けての努力は欠かしてはならないと思っている。また、同様の問題意識を持つ人達の考えも伺ってみたいと切実に願っている。とりとめもなく、若干主観に偏った記述になってしまったが、以上が当センターが行った普及事業の現在までの成果と課題のおおまかな見取り図である。

以上のような事業展開によって、ようやく市民の間に定着してきた当センターの普及活動の維持、さらなる発展を望みたい。（中野）

Ⅲ　調査事業

1995年度調査一覧表

No	遺　跡　名	調　査　地	調査原因	区別	調査期間	遺物・遺構等
1	西元浜貝塚	玉島黒崎41	道路改良	立会	95.4.7	遺物・遺構無し
2	六口島大首遺跡	児島下津井2663-2	道路改良	立会	4.11	製塩土器
3	北面丸山貝塚群第4群	連島町矢柄4794-1	墓地造成	確認	4.13～4.15 11.21～11.30	貝層・中世土器
4	酒津－水江遺跡	西阿知町247-1番地先	浄水場整備	確認	4.18～5.9	瓦片
5	酒津－水江遺跡	酒津315番地先	水路改修	立会	5.16	遺物・遺構無し
6	上東遺跡	上東28番地先	水道管埋設	立会	5.23	弥生土器片
7	七島東貝塚	玉島阿賀崎5丁目地内	下水道管埋設	立会	6.1	遺物・遺構無し
8	黒崎貝塚	黒崎476	下水道管埋設	確認	6.1～6.2	縄文包含層
9	道口古墳	玉島道口2471-1	公園整備	立会	7.7	遺物・遺構無し
10	下津井城跡	児島下津井1103-1	公園整備	確認	7.18～7.19	城跡の一部確認
11	灯籠崎遺跡 灯籠堂伏台場跡	児島下津井4丁目2185外	土砂採取	確認	7.19～8.8	伏台場跡を確認
12	島地貝塚	玉島八島379他	下水道管埋設	立会	7.25	遺物・遺構無し
13	新熊野山遺跡	林941	信徒会館建設	確認	8.8～8.9	遺物・遺構無し
14	後貝塚	玉島長尾地内	下水道管埋設	立会	9.12	遺物・遺構無し
15	上東遺跡	上東地内	道路改良	立会	10.6	遺物・遺構無し
16	新熊野山遺跡	林672	水銀灯設置	立会	10.17	遺物・遺構無し
17	新熊野山遺跡	林696外	水道管埋設	立会	11.2	遺物・遺構無し
18	上東遺跡	上東516-1	レストラン移転	確認	12.5～12.7	遺物・遺構無し
19	阿原貝塚	玉島道越1088	水路改修	立会	12.6	遺物・遺構無し
20	流通センター内遺跡	鳥羽・徳芳地内	流通センター建設	確認	12.14～12.16	土壙墓
21	船元貝塚	粒江2101番地先	道路改良	立会	96.1.5	遺物・遺構無し
22	新熊野山遺跡	林412	水路改修	立会	1.9	遺物・遺構無し
23	酒津－水江遺跡	酒津2826-2	公園整備	立会	2.2	遺物・遺構無し
24	酒津貝塚	酒津1691番地先	水道管移設	立会	2.22	遺物・遺構無し
25	新熊野山遺跡	林671番地先	水路改修	立会	2.22	遺物・遺構無し
26	御堂奥遺跡	二子1624-1番地先	水路改修	立会	3.6	遺物・遺構無し
27	酒津－水江遺跡	水江1184-1	宅地造成	立会	3.21	遺物・遺構無し
28	酒津－水江遺跡	水江地先高梁川堤外	学術調査	確認	3.21～3.28	弥生土器・住居跡



調査地位置図（S＝1/100,000）

北面丸山貝塚群第４群発掘調査報告

遺 跡 名　北面丸山貝塚群第４群（きたもまるやま）

調 査 地　倉敷市連島町矢柄字北面平 4794-1（調査一覧表 No.3）

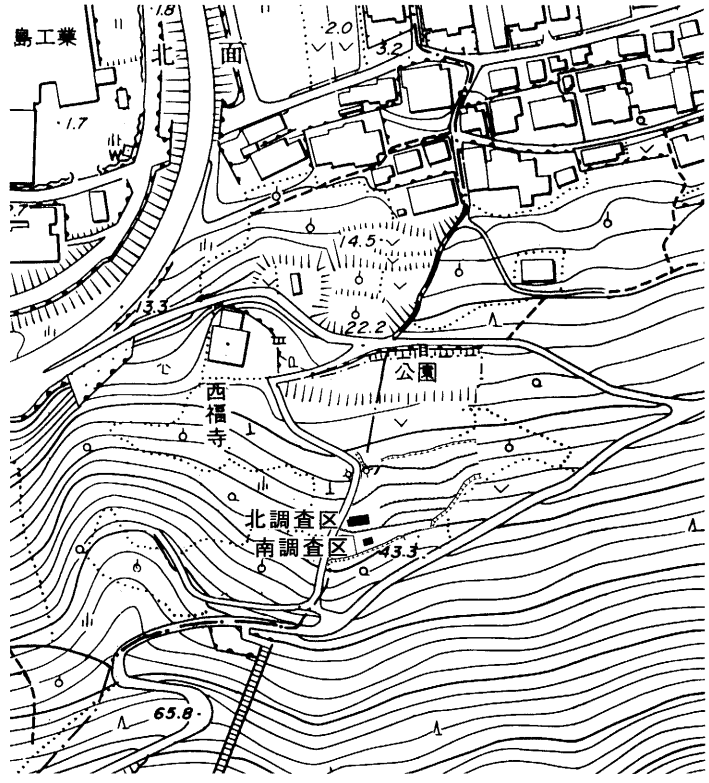
調査期間　（確認調査）　1995年　4月13日～　4月15日
（発掘調査）　1995年11月21日～11月30日

北面丸山貝塚群は、倉敷市のほぼ中央に位置する連島山塊の北斜面に立地する。北面地区には標高20～40ｍを中心に、中世の小貝塚が密集しており、貝塚群として認識されている。同貝塚群第４群では、山の斜面を切り盛りした段々畑にハマグリなどの貝殻が散布しており、古くからその存在が知られていたようである。当遺跡地内で墓地造成工事が計画されたため、遺跡の範囲確認調査を行い、工事予定区域の一部で貝層が確認されたため、発掘調査を実施した。

貝層が確認されたのは、調査区内の段々畑の最上段に設定したトレンチ１とその下段に設定したトレンチ２で、地表下50～60cmのところでハマグリを主体とする厚さ20～30cmの混貝土層が検出された。そこで、各トレンチを基点にして南調査区、北調査区を設定した。

南調査区はトレンチ１のすぐ南に設定したが、南側に未開墾の斜面がせまっているため、３×２ｍの狭小なものである。トレンチ１で確認された貝層は調査区の北側にごくわずか残存しているだけで、開墾によってほとんどが削り取られていることが判明した。混貝土層は、黄色灰色から黒褐色を呈しており、ハマグリの他ハイガイ、オキシジミ、アカニシがわずかに含まれる。土器などの遺物はほとんどみられない。北調査区は、南調査区との比高差が約2.5ｍで、地表面での貝殻の散布が顕著である。上層の貝殻は、おそらく上段の貝層が開墾の際に流出したものと考えられる。調査規模は７×３ｍ。混貝土層は調査区の西半を占める浅く溝状に窪んだ地形に堆積したものであることが明らかになった。この層は灰褐色から暗褐色で、ハマグリを主体にハイガイ、オキシジミ、マガキがわずかに含まれる。出土遺物は土鍋や亀山焼と思われる鉢などが少量ある。これらの年代観は13世紀頃と推定される。貝層直下には人頭大の花崗岩礫群が存在するが、人為的な構築物とはみなし難い。

（小野）



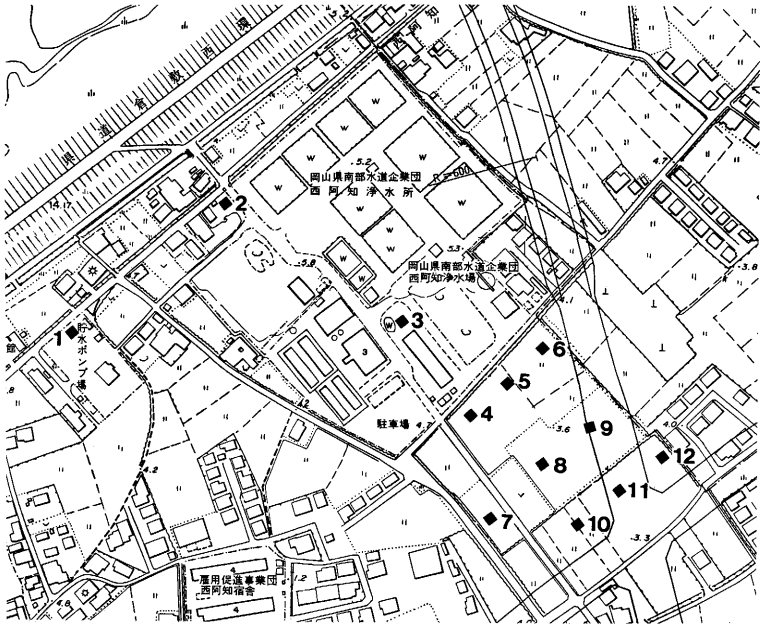
調査区位置図（S＝1/2,500）

酒津－水江遺跡確認調査報告

遺 跡 名　酒津（さかづ）－水江（みずえ）遺跡
調 査 地　倉敷市西阿知町247番地の1地先（調査一覧表No.4）
調査期間　1995年4月18日～5月9日

本調査は、岡山県南部水道企業団の浄化施設等の整備計画に伴う確認調査である。

調査地は、高梁川が八幡山を東に迂回して古水江渡を越えてすぐの東岸堤防下にあたる。同企業団敷地内では、昭和31年（1956年）2月、上水道濾過池工事の際に遺物包含層が発見され、間壁忠彦氏により「新屋敷遺跡」の名称で層序、出土遺物の詳細が報告されている[1]。



トレンチ配置図（S＝1/5,000）

今回の確認調査は、現在の構内に3箇所、構内南側の浄化施設建設予定地に9箇所のトレンチを設定して行った。上記の上水道濾過池に近いトレンチ1・2・3では、遺物包含層の存在が予想されたが、造成土層の下は灰色粘質土層、砂礫層等の堆積層がみられるのみで、標高3m以下の灰色シルト層まで掘り下げてみても、遺物包含層は確認されなかった。また、浄化施設建設予定地（現況は水田）に設定したトレンチ4～12でも耕作土の下は基本的には灰色粘質土層、砂層、砂礫層が堆積し、遺物包含層は確認されていない。いずれのトレンチでも標高2.5m前後で灰色シルト層となっている。遺物については、トレンチ4では、砂礫層から古代の瓦片が出土し、トレンチ10・12の灰色シルト層から中世土器の小破片が出土している。トレンチ9では灰色粘質土層を掘り刻んだ畦畔状の遺構が検出された。これは、粘土層を70～100cmの幅で溝状に垂直に掘り取り、結果的に幅20～40cm、高さ30～40cmの粘土が畦畔状に残っているものである。同様の遺構はこの地点の西約350mにおいて平成4年（1992年）に行った公園建設に伴う確認調査で検出されている。近代以降のものであろう。

以上のように、今回の調査では酒津－水江遺跡の主体となる弥生時代から古墳時代にかけての遺物や包含層は確認されておらず、昭和31年に発見された遺跡の広がりを把握するには至らなかった。（小野）

註（1）間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学第2号』1958年

黒崎貝塚確認調査報告

遺 跡 名　黒崎貝塚（くろさき）
調 査 地　倉敷市黒崎 476（調査一覧表 No.8）
調査期間　1995年6月1日～6月2日

黒崎貝塚は、倉敷市黒崎の丘陵裾の部分に存在する縄文時代の貝塚である。この範囲内で昨年度に継続して公共下水道管埋設工事が計画されたため、遺跡の範囲と性格を把握する目的で確認調査を実施した。なお、調査地点は昨年度の調査地点東側の道路上である[1]。今回の調査にあたっては、下水道管埋設予定地の道路上に5箇所トレンチを設定した。

トレンチ1・3・4・5については、地表下約130～160cm掘削を行った。いずれのトレンチにおいても層序は同様の状況を呈していた。アスファルト及び道台の下層には、道路の造成土が約80cm前後と非常に厚く盛られていた。この下層は、暗茶褐色粘質土の自然堆積層または、灰褐色土の地山となっている。なお、いずれのトレンチからも明確な遺構・遺物等は確認されていない。トレンチ2については、地表下170cm掘削を行った。前述のトレンチ同様に非常に厚い造成土を取り除いた地表下約120cmで、黒褐色粘質土の層が検出された。この層は、厚さ約10～20cmでここから縄文土器片が検出されており、貝殻を含んではいないものの、貝塚に伴う包含層の一部と考えられる。なお、この下層は暗茶褐色粘質土の自然堆積層であった。

今回の確認調査では、トレンチ2において貝塚に伴うと考えられる包含層の一部が検出されている。これは、昨年度の調査で報告したこのトレンチ東方の民家に存在する貝塚の端にあたるものと考えられる。また、後日の下水道工事での立会調査時に、この包含層は、トレンチ2から北へ約10m、南へ約12mの広がりを持つことが確認された。（片岡）

註（1）「黒崎貝塚確認調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報2』 倉敷埋蔵文化財センター　1995年

トレンチ配置図（S＝1/2,500）

下津井城跡確認調査報告

遺 跡 名　下津井（しもつい）城跡
調 査 地　倉敷市児島下津井 1103-1（調査一覧表 No.10）
調査期間　1995 年 7 月 18 日～ 7 月 19 日

下津井城跡確認調査は、昨年に引き続き公園整備事業に伴って実施したものである。今回の計画は東西に細長い下津井城の西端、馬場跡と呼ばれる曲輪の北側斜面に、下の道路から登る遊歩道を設置するというものである。

調査地位置図（S=1/2,000）

馬場跡は西の丸を北側と西側から囲むように取りついており、城の他の曲輪が石垣で普請されているのに対して、ここには石垣が築かれていない。馬場跡の北側斜面の下方はやや緩やかで、後世に段々畑が造成されている。馬場跡に近づくほど急傾斜となっている。斜面における防御施設の有無を調査の主たる目的として、計画された遊歩道に従って４箇所のトレンチを設定した。

結果、斜面の比較的下方に設定したトレンチ１～３では基本的に表土の下は旧耕作土・自然堆積土・地山であり、遺構・遺物ともに検出されなかった。馬場跡とは急斜面によって隔てられており、基本的には城郭外であろう。また、段々畑の造成によってかなり地形が改変されており、遺構などが存在したとしても、削平されてしまっていると考えられる。

園路が馬場跡に取りつく箇所に設定したトレンチ４では、現地表面から約 0.8 m のところで地山を 0.6 m程度垂直に掘り下げて平坦面を造りだしていることが分かった。馬場跡は北側から西側にかけてがやや高くなっており、土塁が巡っていた可能性もある。平坦面はこの土塁の外側となり、馬場跡周囲をとりまく武者走りのようなものかもしれない。調査範囲が限られたためその性格を確認することはできなかった。また、周辺の地形観察及び後日の工事中における立会によっても、竪堀などの防御設備は認められなかった。（藤原）

採石工事に伴う遺跡確認調査報告

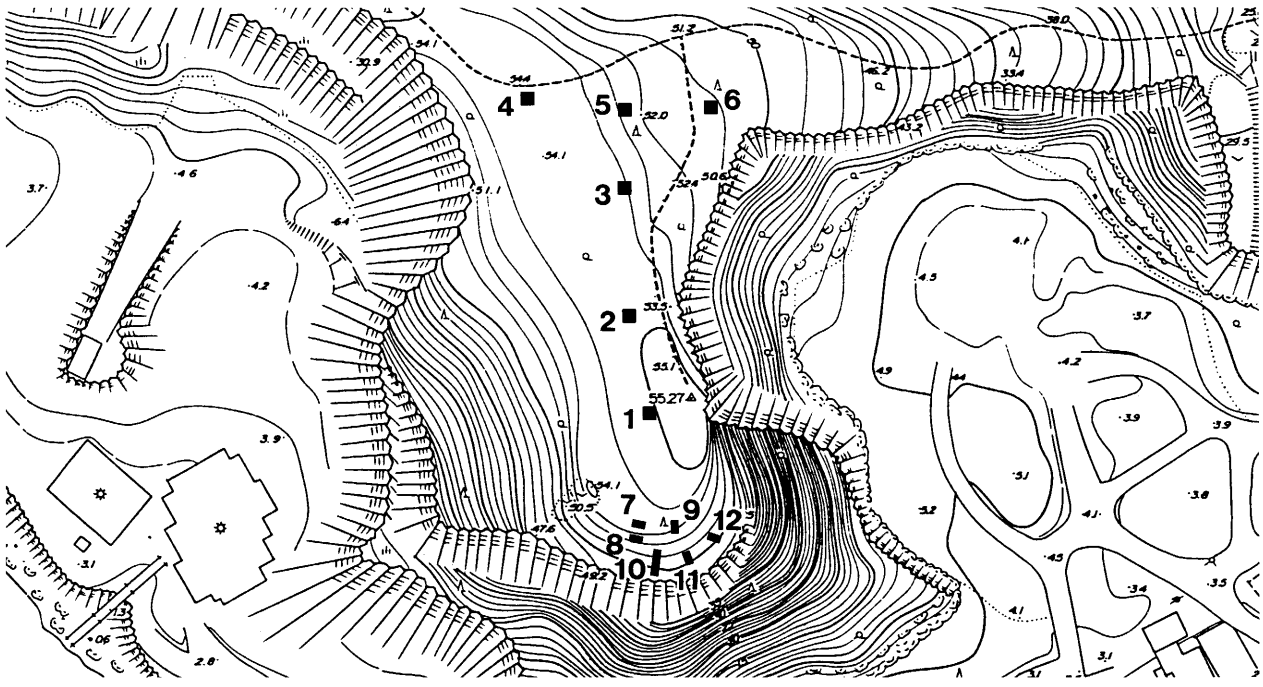
遺 跡 名　灯籠崎遺跡・灯籠堂伏台場跡
調 査 地　倉敷市下津井4丁目2185外41筆（調査一覧表No.11）
調査期間　1995年7月19日～8月8日

今回の確認調査は、倉敷市下津井地内に予定された採石工事が、灯籠崎遺跡及び灯籠堂伏台場跡の範囲にかかるため行ったものである。灯籠堂伏台場跡については、地形的に見て既に土砂採取工事により削平されている可能性が強いと思われていたが、念のため丘陵先端部の伐採を行ったところ土塁の痕跡と思われる地形の高まりが確認されたため、急きょトレンチを設定したものである。

〔灯籠崎遺跡〕

ほぼ南北に延びる尾根筋上にトレンチ1・2・4を設定した。トレンチ1では、表土直下に近現代の瓦片を多く含む黄茶色細砂層があり、何らかの建物に関する造成土と思われる。この層の下は花崗岩の風化土である黄茶色粗砂となり、地表下約80cmで花崗岩バイラン土の地山となる。遺物としては、地山直上の黄茶色粗砂から縄文土器と思われる土器細片1とサヌカイト片1が出土したが、混入と考えられる。

トレンチ2・4については、どちらも表土・耕作土・自然堆積土・地山という層序をなす。トレンチ2は地表下約80cm、トレンチ4は地表下約60cmでそれぞれ花崗岩バイラン土の地山に達する。遺物等は出土しなかった。



トレンチ配置図（S＝1/1,500）

前述の尾根筋から東方向へ派生する尾根上にトレンチ3・5・6を設定した。トレンチ3・5では、他のトレンチと違い耕作土の直下にマンガン粒を多く含む黄褐色土が認められたが、この層からはトレンチ3でサヌカイト片が1点出土しただけであった。他の遺物としては、どちらのトレンチも耕作土中から近現代の土器片に混じってサヌカイトの小片が数点出土しており、トレンチ5では石鏃が1点含まれる。

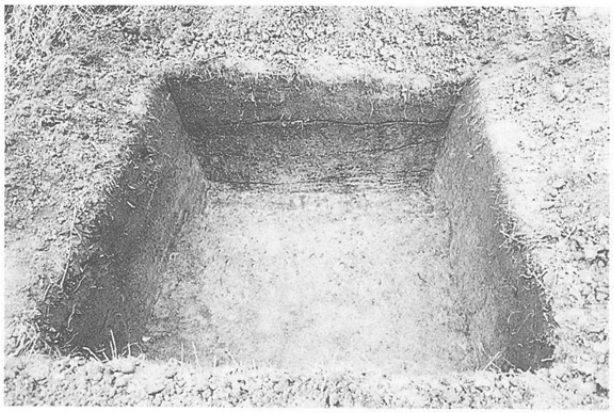
トレンチ6では、耕作土の下に自然堆積土をはさんで地表下約70cmで花崗岩バイラン土の地山となる。遺物等は出土しなかった。

以上のとおり、灯籠崎遺跡については、旧石器時代から縄文時代にかけての散布地とされていたが、遺跡自体は既にほとんど流失している状況が明らかとなった。

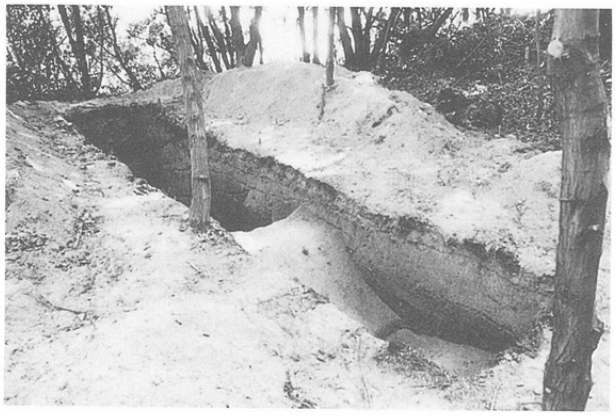
〔灯籠堂伏台場跡〕

台場跡の北西角及び西側にトレンチ7・8、後側にトレンチ9、前面にトレンチ10・11、東側にトレンチ12を設定した。その結果、トレンチ10で土塁の全体を、またトレンチ11・12でそれぞれ土塁の一部を確認した。土塁は、トレンチ10では全て盛土によって、トレンチ11・12では地山の掘り込みと盛土によって造られていた。土塁の大きさは、トレンチ10によれば幅2.2m・高さ70cmを測る。

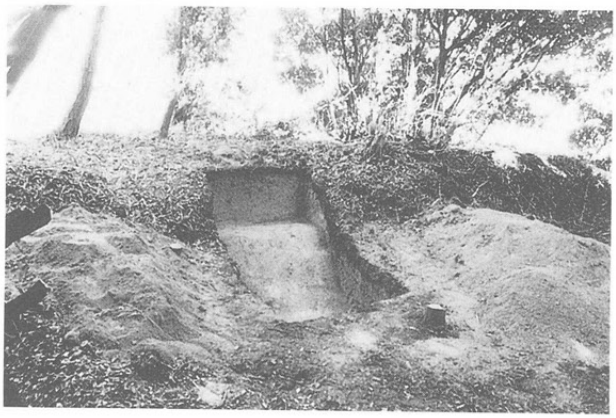
これに対し、トレンチ7～9については地山の掘り込みだけで盛土は確認できなかった。したがって、地形の高い台場の西側については主に地山の削り出しによって、また地形が低くなる前面から東側にかけては地山の掘り込みと盛土によって、それぞれ土塁を造っていたと思われる。トレンチ11・12を設定した台場跡の東側から前面にかけては、以前の採石工事により土塁の一部が破壊されており、土塁を含めた台場跡の全体の大きさについては明らかではないが、土塁内側の大きさは、東西約15m・南北約7mを測る。また、各トレンチにおける土塁の向きから、土塁は6角形以上の多角形を呈していたと思われる。なお、土塁以外の遺構は全く検出されず、遺物の出土も皆無であった。　（鍵谷）



トレンチ5南壁



トレンチ10全景



トレンチ12全景

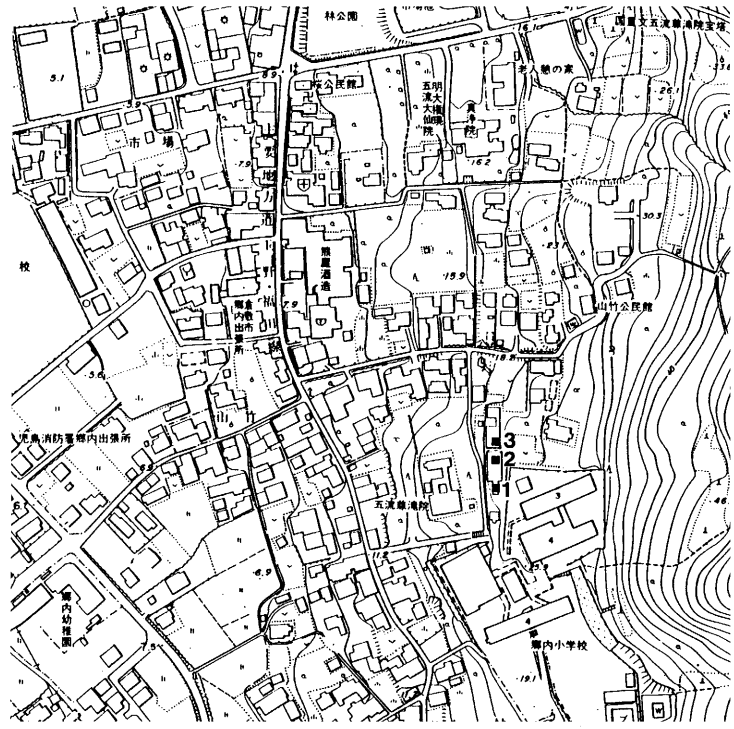
新熊野山遺跡確認調査報告

遺 跡 名　新熊野山遺跡（しんくまのさん）
調 査 地　倉敷市林 941（調査一覧表 No.13）
調査期間　1995年8月8日～8月9日

新熊野山遺跡は、倉敷市林に存在する県の史跡に指定されている遺跡である。この範囲内で寺院の信徒会館の建設が計画されたため、遺跡の存在及び範囲を確認する目的で確認調査を実施した。計画地の南半には、南北に基壇状の高まりがみられた。寺院からの聞き取り調査では、この上には、つい先頃まで集会所が建っていたとのこと。また、基壇状の高まりの北半分の造成は、戦後間もない時期に行われ、建物も戦後に建てられたということである。調査にあたっては、建設予定の信徒会館の長軸に沿ってトレンチを３箇所設定した。このうちトレンチ１・２は基壇状高まりの上に、トレンチ３については、その下に設定した。

トレンチ１では、表土の厚さが20cm程度。その下には、厚さ50cm程度の造成土、さらに風化した花崗岩の地山が続く。また、トレンチ北西端で、造成土の上面から掘り込まれた廃棄土坑を検出した。遺物は、近代以降の灯明皿、瓦片等が廃棄されていた。トレンチ２では、表土は15cm程度の厚み。その下には厚さ100～140cmの造成土、さらに風化した花崗岩の地山が続く。造成土は厚く、その土質も均質であり、機械力を使用して造成したものと思われる。これは、聞き取りの結果に矛盾しない。トレンチ３では、表土を10cm掘削しただけで、風化した花崗岩の地山が現れた。

今回の調査の結果では、トレンチ１で検出された近現代の廃棄土坑以外には、遺構・遺物は確認されなかった。基壇状の高まりの造成は、寺院からの聞き取り調査のとおり、戦後に行われたようであった。またその下層についても、遺構は確認されなかった。基壇状高まりの下の部分については、遺跡の広がりの外であったか、古くに寺院内の整地をした段階で遺構が既に失われたものかのどちらかであろうと考えられる。（片岡）



トレンチ配置図（S＝1/5,000）

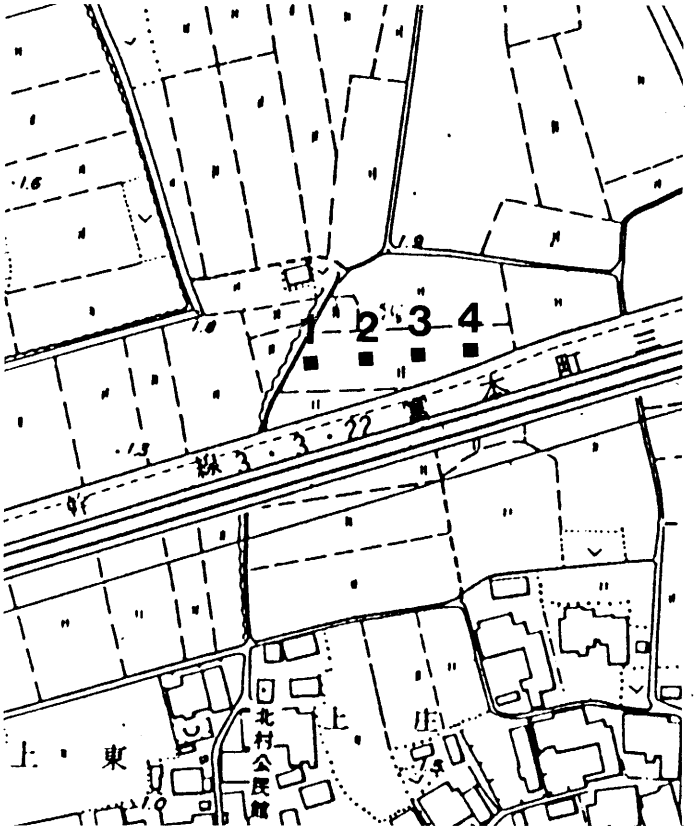
上東遺跡確認調査報告

遺 跡 名　上東（じょうとう）遺跡
調 査 地　倉敷市上東字才ノ元 516-1（調査地一覧表 No.18）
調査期間　1995 年 12 月 5 日～ 12 月 7 日

上東遺跡確認調査は、県道吉備松島線用地の代替地のレストラン建設に伴い、当該地内における遺跡の存在状況を確認することを目的に実施した。

調査地は、従来知られている上東遺跡の西端にあたり、新幹線の側道沿いに位置している。従前に実施された新幹線および側道建設に伴う発掘調査において、当該地南側で弥生時代とみられる数条の溝状遺構が検出されている地点である。調査は、工事計画区域内に２×２ｍのトレンチをおおよそ15ｍの間隔をあけ、ほぼ一直線に４箇所設定し、土層観察を中心に遺跡の確認を行った。

このうち西端のトレンチ１では、水田耕作土の下に厚さ約 30cm の砂質土がみられ、その下には４層に分けられる粘土層が堆積しているが、遺構，遺物とも確認されていない。さらに粘土層より下はオリーブ黒色のシルト層が続いており、一部で葦状の植物遺体がみられた。トレンチ２では、現水田面から約60cm下の褐色粘土層を基盤として南に向かって下がる落ち込みが検出されている。この落ち込みは今回の確認調査で唯一検出された遺構で、溝状の遺構の一部と思われる。落ち込みは、トレンチ内では北東から南西方向に北側の肩が検出されており、長さ２ｍ、幅 1.2 ｍ、深さ 0.5 ｍを測る。落ち込み内の堆積土は砂質が強く、中からわずかに土器細片１点が検出されているが、他のトレンチの層位からみて、少なくとも弥生時代以降のものと判断された。また調査区東半のトレンチ３・４では、現水田耕作土の下の下に３層に分けられる厚さ約 40cm の砂質土、その下に４層からなる厚さ約 50cm の粘土層，最下に暗オリーブ色のシルトが続く。遺物は、わずかながら砂質土から須恵器片、粘土層から弥生土器と思われる細片が検出されているが、遺構等は認められていない。　（福本）



トレンチ配置図（S＝1/2,500）

流通センター内遺跡確認調査報告

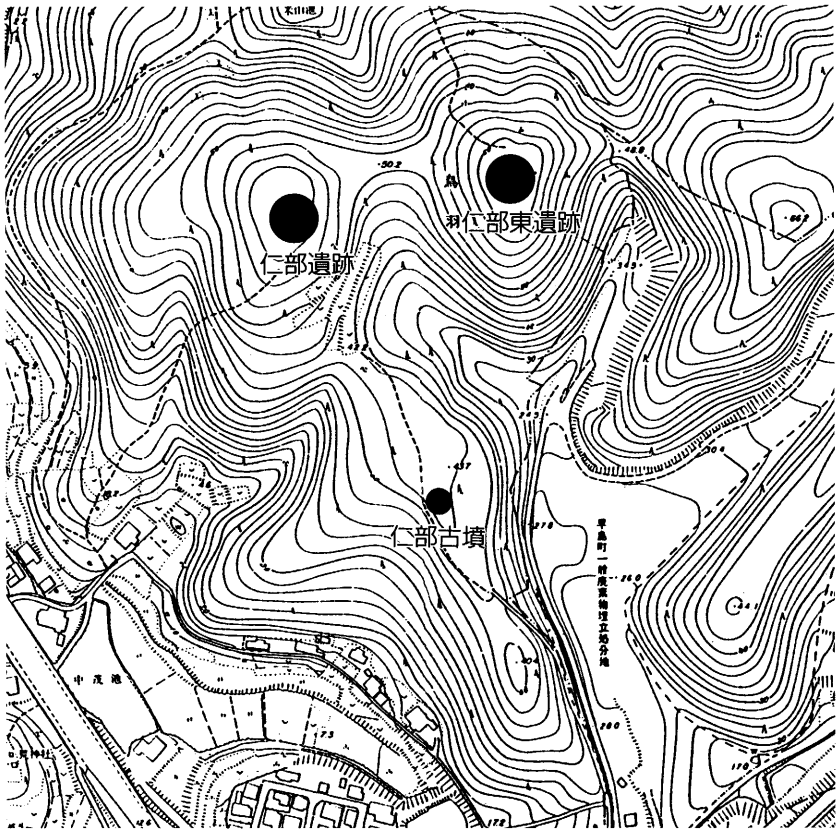
遺 跡 名　仁部（にぶ）古墳・仁部遺跡・仁部東遺跡
調 査 地　倉敷市鳥羽地内（調査一覧表 No.20）
調査期間　1995年12月14日～12月16日

当該調査は、流通センター予定地内の遺跡存在状況の確認を目的として実施された。

仁部古墳が存在するとされた地点には台地状の高まりが認められた。ここに2箇所のトレンチを設定し、地下の状況を調べた。トレンチ1の規模は1×7m、古墳とおぼしき高まりの形態を調べるため、その傾斜と並行に設定した。トレンチ2の規模は1×3m、埋葬施設を確認するため高まりの頂部に設定した。双方とも20～30cmの掘削で地山があらわれ、盛土、埋葬施設等は認められなかった。また、近世～近代にかけての土器片・瓦片等が極少量採集されただけであり、古墳にかかわる遺物は皆無であった。かつて存在した古墳が耕作等で失われたという可能性もあるが、従来古墳とされていたものは、近年の地形改変を誤認したものと考えるべきだろう。

仁部遺跡では中世土器の表採が伝えられている。10～20m間隔で2×2mのトレンチを5箇所設定し、掘削したが、どのトレンチにおいても遺構、遺物は検出されなかった。

仁部東遺跡には塚との伝承が残されていた。この地点は仁部遺跡東方の山の頂に位置し、事前の観察で径25mほどの不自然な地形の高まりが確認できた。この頂部に、1×4mのトレンチ8を設定した。その南北傾斜変換地点に規模2×2mのトレンチ9・10をそれぞれ設定した。トレンチ8では4基の土壙墓の存在が確認された。これに伴う遺物として、土器片と骨片が多数、鋳造貨幣が数点採集された。時代の不分明な土器の細片しか検出されていない。鋳造貨幣の時期から中世以降の墓だと思われる。トレンチ9・10では遺構は認められなかった。　（中野）



トレンチ配置図（S＝1/5,000）

酒津－水江遺跡確認調査報告

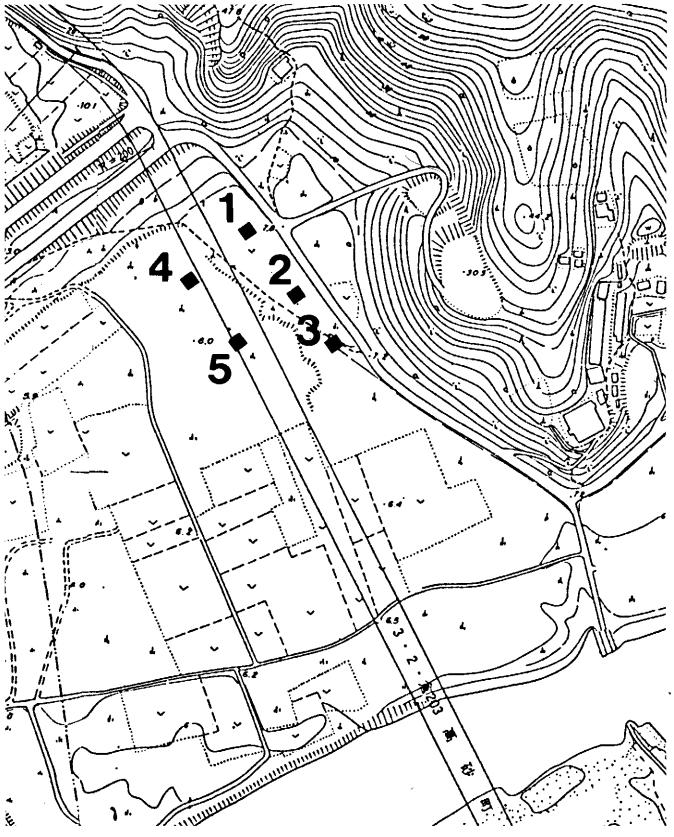
遺 跡 名　酒津（さかづ）－水江（みずえ）遺跡
調 査 地　倉敷市水江地先高梁川堤外（調査地一覧表 No.28）
調査期間　1995年3月21日～3月31日

平成7年度の酒津－水江遺跡の確認調査は、高梁川の右岸、柳井原堰の下流付近を中心に実施した。当該調査地点は、酒津八幡山の西を迂回した旧西高梁川が平野部に出る部分にあたり、当該地点南の古水江渡しの東方山裾からは、弥生時代中期から中世にかけての遺跡が確認されている。このため八幡山西方山裾部分の河岸段丘ないしは砂州状の高まりに遺跡の存在する可能性を考慮し、今回の調査を実施した。

調査は、対象地区内に2×2mのトレンチをおおよそ50mの間隔をあけ5箇所（トレンチ1～5）設定し、土層断面の観察を中心に遺跡の確認を行った。なお調査の基準線は、高梁川右岸の建設省基準杭9K000を原点に同左岸の9K000杭を視準した線を測量基準とした。

トレンチは、山裾に沿って3箇所と西寄りの地点に2箇所設定した。このうち山寄りのトレンチ周辺は、かつて大規模に造成がなされていたようで、各トレンチとも現地表下約1.7mまで造成土がみられる。造成土の直下、標高5m以下は暗青灰色～緑灰色のシルト状の粘土が続き、一帯が湿地状を呈していたことをうかがわせる。また西寄りのトレンチ4では、厚さ1mの造成土の下、標高約4.6mでかつての水田耕作土を思わす灰色粘土がみられるものの、以下は暗灰黄色砂層をはさんで、標高4.0mで暗灰色のシルト層となる。同じくトレンチ5では、明確な水田層はみられないものの造成土の下に砂層をはさんで標高3.8mで灰色シルト層が検出されており、やはり他と同様に湿地状を呈するものであった。

今回の調査では、各トレンチとも遺構・遺物は検出されておらず、いずれも下方でシルト状の粘土となっていた。これらにより、当該調査区周辺は旧西高梁川の河道内ないしは後背湿地にあたるものと想定された。（福本）



トレンチ配置図（S＝1/5,000）

Ⅳ　資料紹介

倉敷市内の有茎尖頭器

藤　原　好　二

平成４年度に発掘調査を行った王子が岳南麓遺跡では、有茎尖頭器３点、神子柴型石斧１点とまとまった数の縄文時代草創期の遺物が出土している。平成７年度に実施した王子が岳南麓遺跡調査成果展において、関連資料として市内出土の有茎尖頭器を集めてみたところ、思ったより数多く発見されていることがわかった。成果展期間中、これらの資料を実測する機会を得たので今回紹介することにした。

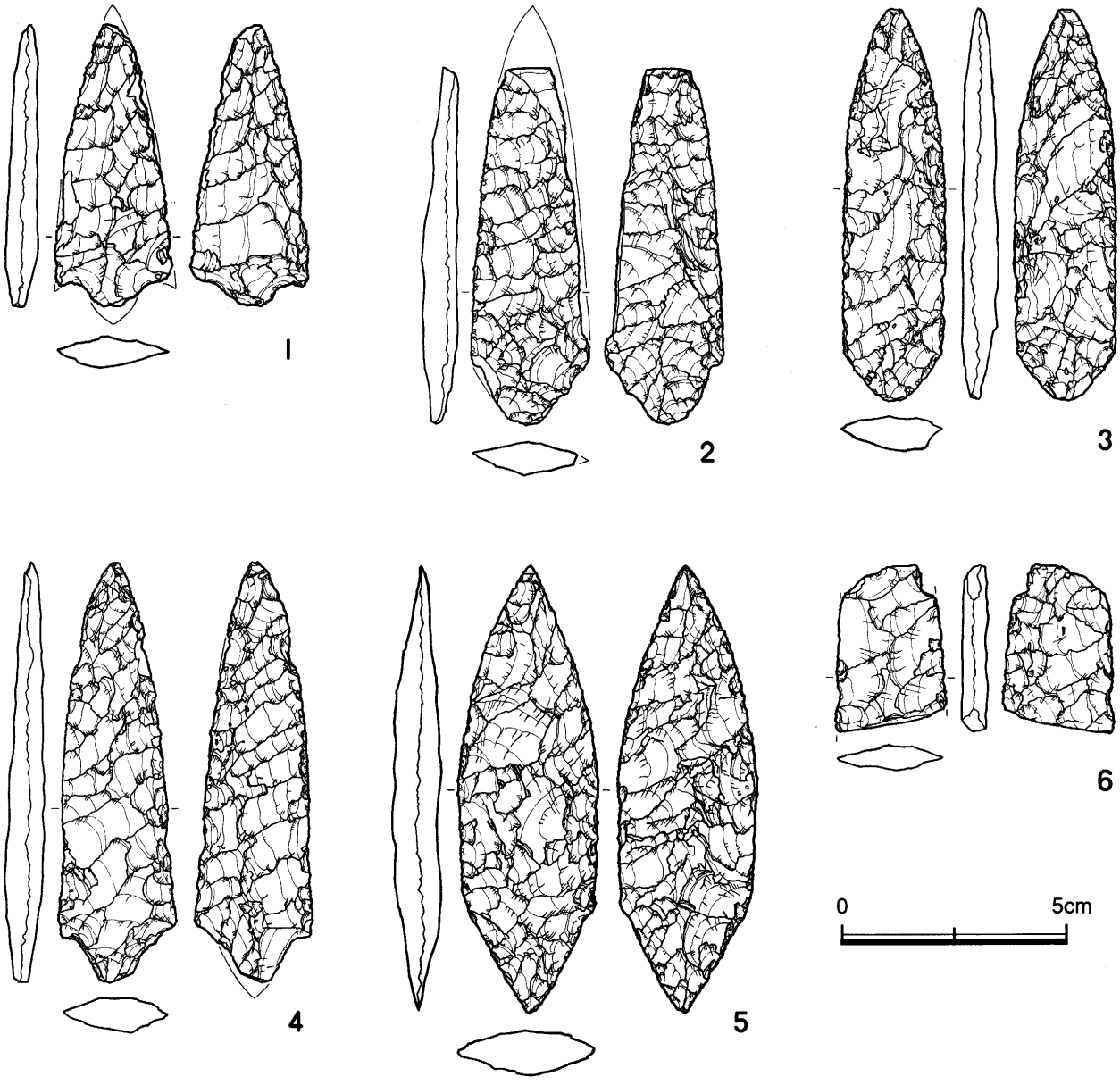
紹介する６点は全て安山岩製である。１・２は玉島黒崎の中津貝塚採集とされるものである。両方とも個人所有の品であり、採集時の詳細は不明である。１は先端部、茎部、かえりが欠損している[1]。２は先端から右側縁にかけて衝撃剥離が入り、先端と右側の刃部が失われている[2]。３は瀬戸中央自動車道児島・坂出線陸上ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査によって山際紫山遺跡[3]から出土した。弥生時代の住居跡にまぎれこんで発見されたものである。図は今回新たに実測したものである。４は庄地区のほ場整備に伴う発掘調査によって矢部伊能軒遺跡から出土した。茎部が欠けている。５は児島唐琴の琴浦小学校の裏山の向山遺跡[4]で採集されたものである。採集時の詳細は不明である。６は山陽新幹線建設に伴う発掘調査によって二子御堂奥遺跡から出土したものである[5]。先端、基部ともに失われているが、斜状並行剥離などの特徴から有茎尖頭器と考えられる。

市内で有茎尖頭器は10点以上発見されているが、今回の企画展ではその約半数を集めることができた。展示した資料は大きくて見栄えがよいため、王子が岳南麓遺跡出土の展示品の影がやや薄くなってしまったのは残念だった。しかし有茎尖頭器は形態的に石槍としての機能がわかりやすく、見学者に好評であったのは幸いであった。

番号	出土遺跡	所在地	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	所有・保管
1	中津貝塚	玉島黒崎	(6.31)	(2.66)	0.76	12.2	個人
2	中津貝塚	玉島黒崎	(7.93)	(2.69)	0.83	17.6	個人
3	山際紫山遺跡	児島上の町	8.69	2.27	0.85	19.4	岡山県古代吉備文化財センター
4	伊能軒遺跡	矢部	(9.40)	2.66	0.85	19.8	倉敷埋蔵文化財センター
5	琴浦向山遺跡	児島下の町	9.93	3.16	1.11	32.1	倉敷考古館
6	二子御堂奥遺跡	二子	(3.71)	(2.51)	0.63	7.3	岡山県古代吉備文化財センター

(　)内は現存値

有茎尖頭器計測表



有茎尖頭器実測図（S＝2/3）

なお、王子が岳南麓遺跡調査成果展を開催するにあたり下記の方々・機関にお世話になった。末筆ながら記して感謝いたします。

岡山県古代吉備文化財センター、岡山県立博物館、倉敷考古館、宇垣匡雅、原田力、宗澤弘

註（1）現在、倉敷市玉島歴史民俗海洋資料館に展示している。
（2）永山卯三郎 『倉敷市史　第一冊』名著出版 1973年
（3）「本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ」『岡山県文化財発掘調査報告71』岡山県教育委員会 1988年
（4）『倉敷の古代』倉敷考古館 1972年
（5）資料の存在については宇垣匡雅氏にご教示いただいた。

玉島富ジョオゴナル遺跡出土の土器

福本　明

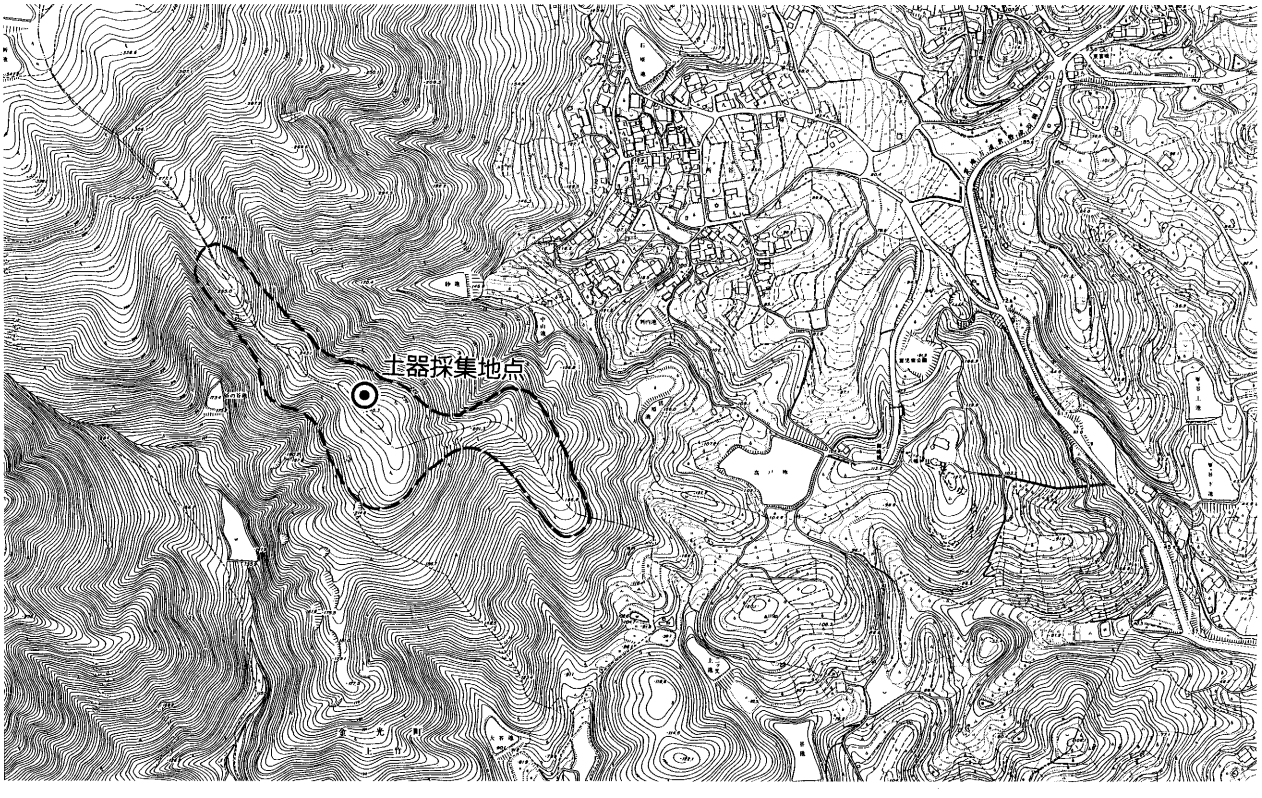
1．はじめに

倉敷市では、平成４年度から文化財分布図の改訂作業に伴う分布調査を、地域ごとに分け順次実施している。平成７年度においては玉島地区を中心に調査を行い、同年11月に玉島富地区の遺跡についての調査を行う中で、中山頼夫氏を中心とした地元の方々のご協力のもとに、今回紹介するジョオゴナル遺跡周辺の現地調査を行うことができた。その折、地元在住の花土進氏が採集されたといわれる同遺跡出土の土器に接する機会を得、今回同氏のご好意により実測、図化することができので、ここに紹介するものである。

なお「ジョオゴナル遺跡」の名称については、昭和50年度刊の倉敷市文化財分布図では、「城がなる遺跡」として記載されているが、地元では遺跡周辺の地名を「ジョオゴナル」と呼称しており[1]、今回の報告ではあえて「ジョオゴナル遺跡」の名称を使用した。

2．遺跡の位置と概要

玉島富地区は、倉敷市玉島の北西端の山あいに位置しており、北を矢掛町、西を金光町と接している。とりわけ富と矢掛町横谷をつなぐ富峠は、古くから玉島港と矢掛、成羽を結ぶ交通の要衝として知られている。ジョオゴナル遺跡は、富の集落の南西にあたり、標高405mを最高所とす



遺跡位置図（S＝1/10,000）

る遙照山山塊から南東へ派生する標高240m程の尾根の先端近くに位置しており、遺跡を跨ぐ形で尾根の稜線上を倉敷市と金光町との境界が走っている。遺跡の所在する尾根は、南東に向かって緩やかに下りながら延びており、ジョオゴナル遺跡周辺では幅30m、長さ80m程にわたって比較的大きな平坦地が開けている。現在遺跡周辺は、樹木がかなり繁茂しており、鬱蒼とした山林となっているが、南方向へは遠く水島灘周辺の瀬戸内海を望むことができる。

今回ここに紹介する資料は、昭和50年の夏に花土進氏が採集されたもので、氏の記憶によると土器出土地点は、富の集落の西のはずれにある砂池からジョオゴナルに向かって登った北東向きの斜面で、尾根の平坦地からわずかに下った斜面であったという。そこで今回の現地調査の折に同地点にご案内いただき、周辺を詳細に表面調査したところ、わずかながら土器片を採集することができ、出土地点をほぼ特定することができた。周辺は以前より樹木がかなり繁茂しているとのことであるが、氏の指摘どおり尾根上の平坦地の東側の縁辺部にあたり、平坦地からわずかに下った谷頭に位置している。

また土器の発見当時から指摘されていたとのことであるが、土器出土地点から西へ約15m程離れた平坦地の中央に、南北約７m、東西約６mのほぼ円形を呈する凹地がみられ、あるいは竪穴住居跡等の遺構の存在も考えられるかも知れない。

３．遺物

採集されている遺物は、段ボールのみかん箱３箱に収納されていた。この中には一部に円礫や土管の破片が含まれていたものの、ほとんどが弥生土器で、一部の小型の鉢形土器を除きすべて破片であった。また土器片の表面が荒れて磨滅しているものが多くみられ、採集地点が前述のように尾根上の平坦地から谷に入る斜面であることも考えあわせると、二次的に流れたものであることも考えられる。なお採集されている遺物の中には、サヌカイト等の石器類は全く含まれていない。

土器片のうち口縁部等の破片で個体識別が可能な最小限の個体数は、壺形土器55点、甕形土器56点、高杯形土器21点、器台形土器３点、鉢形土器８点、小型手づくね土器４点となっており、このうち図化できたものが74点ある。

以下、図化できた土器の特徴について簡単に記す。

1～5は長頸の壺形土器である。**1**は口縁部のみの破片であるが、端部は内傾して上下に大きく拡張して、端面には凹線文の痕跡がみられる。**2**は沈線が残る頸部から強く屈曲して広がるもので、端部には２条の凹線文がみられる。**3**は大きく弧を描いて開くもので、頸部外面に縦位のハケメ、内面に横位のハケメを施し、外面の沈線はみられない。同じく**4**も頸部外面は縦位のハケメのみで、頸部下端にハケメ状工具による刺突文を施した突帯がめぐり、上部には同じ工具による「ハ」の字形の刺突文が施されている。**5**は内傾する頸部から強く外反して口縁にいたる破片である。頸部外面には細かいハケメを施し、上にヘラ描沈線がめぐっている。**1・4・5**には丹塗りの痕跡がみられる。

6～11は頸部から強く外反して口縁部にいたる短頸の壺形土器である。**6・7**の口縁端部は内傾

して上下に拡張しており、6には３条の凹線をめぐらしている。8～11は端部を上下に拡張し端面はヨコナデで仕上げている。また10の肩部には板状工具による刺突文が施されている。6・7・10・11には外面に丹が塗られている。

12～15はいわゆる複合口縁を有する壺形土器で、口縁部下端を肥厚させており、拡張部口縁外面はヨコナデを施している。14の頸部にはわずかながら凹線状の痕跡がみられ、15の外面には丹塗りの痕跡が残る。

16は内傾する短めの頸部から屈折して水平に開き、端部を肥厚させたもので、肩は大きく広がっている。全体に磨滅が著しく調整は不明である。

18～30は「く」の字形に屈曲する口縁部をもつ甕形土器で、端部を少し内傾させて肥厚し、外面に凹線を施したもの(18)や肥厚させた口縁端部をヨコナデし、ゆるく凹ませたもの(19～25)、端面をわずかにつまみあげたもの(29・30)などがみられる。26～28は頸部から強く屈曲して広がる口縁部をもち、端部をわずかに上方へ拡張するものである。28は肩がはらず最大径を下位にもち、胴部内面に横位のヘラケズリ、外面にはヨコナデを施している。また26の外面には丹が塗られている。31は短く屈曲した口縁の端部を上方に拡張したもので、胴部内面には横位のヘラケズリを施す。33～35の甕形土器はやや開きぎみに短く立ち上がる口縁部をもつ。37～42はやや大型の甕形土器で、頸部から強く屈曲し口縁端部を上下に拡張したもの(37・38)、口縁端部が上方へ立ち上がる複合口縁をもつもの(39～42) などがみられる。このうち36～38・41・42の外面には丹が塗られている。

43～50は壺形土器あるいは甕形土器、 鉢形土器等の底部である。いずれも比較的安定した平底で、外面にはヘラミガキを施したものが多くみられ、内面はヘラケズリないしはハケメ調整が施されている。

51～60は高杯形土器である。51・52は斜め上方に直線にのびた杯部から稜をもって外反し、口縁端部は斜め上方に拡張している。磨滅が著しいのではっきりしないが、口縁端部上面には凹線文が施され、51の内面には細かいハケメがみられる。いずれも円盤充填法による成形で、全体に丹が塗られている。53・54はやや内湾ぎみの杯部から稜をもって外反し、口縁部にいたるもので55・56も同様の筒部と考えられ、成形は挿入接合によっている。いずれも表面が磨滅しており調整ははっきりしない。高杯の脚には57～59のように端部を拡張して断面三角形を呈するものと60のように短脚で屈曲して端部を方形に納め面をもつものがみられる。調整は外面をヨコナデ、内面にヘラケズリを施しており、60は内面もヨコナデをして仕上げている。透かしの円孔の数はいずれも小片であるためはっきりしないが、４～５方であると思われる。なお53・54・ 57～59には丹が塗られている。

61は器台形土器である。筒部から大きく外反して口縁部にいたるもので、端部は内傾して上下に拡張し、外面には５条の凹線文をめぐらせている。また口縁下端には板状工具による刻み目を施している。筒部外面は縦位のハケメ、口縁ぶ内側には横位のハケメ、筒部内面には指頭圧痕が残り、外面及び口縁部内面には丹が塗られている。

62・63はいずれも口縁部付近のみの小片で、器台形土器と思われるが、壺形土器である可能性も考えられる。62は頸部から大きくひろがり、屈曲してほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもち、口縁部下端は下方にやや突出している。頸部外面には凹線文をめぐらし、内面は頸部上端まで横位のヘラケズリを施している。また口縁部外面には退行した凹線風の条線がめぐらせれている。63は水平に広がる口縁部から屈曲してやや内湾ぎみに立ち上がり、外面にはわずかに条線が残されている。62・63とも磨滅が著しいが、口縁部内面および外面に丹塗りの痕跡が認められる。

64・65はやや小形の鉢形土器である。内湾気味の体部から「く」の字形に屈曲して上方へ開く口縁部をもち、端部はわずかにつまみあげている。それぞれ内面はヘラケズリが施され、64の外面は荒いハケメ、65はナデにより仕上げられている。66～68は大形の鉢である。いずれもいわゆる複合口縁を有するもので、内面にはヘラケズリを施している。67の外面には縦位のハケメがみられ、他はナデにより仕上げられている。66・68の外面および口縁内面には丹が塗られている。69は小形の鉢形土器で、全体に丹が塗られている。平底の底部から内湾して立ち上がり、口縁部は小さく屈曲して短く外反し、端部は丸くおさめている。

70は小形の脚台付きの鉢形土器とでも呼ぶべきもので、小さな胴部から複合口縁状に強く屈曲して直線状に長く斜め上方にのびる口縁をもつ。器表面が荒れているため調整ははっきりしないが、全体にヨコナデにより仕上げられているようである。

71は小形の壺形土器の破片で、頸部はゆるやかに屈曲して広がっている。全体にナデにより仕上げられており、口縁部内面および外面には丹が塗られている。

72～74は小形の鉢形土器で、72はしっかりとした平底の底部からやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は丸くおさめている。外面は磨滅が著しく調整は不明であるが、内面には指頭圧痕が顕著にみられる。73・74は内外面に成形時の指頭圧痕が残っており、小さな底部から外反ぎみに広がる口縁部をもつ手づくねの土器である。

4．まとめ

今回紹介した土器群は、先述したように採集資料であり、これらによって直ちに遺跡全体の性格を明らかにするわけにはいかないが、ここでは土器を中心に遺跡の状況をも踏まえ、いくつかの検討課題を整理し、まとめとしたい。

まず、ジョオゴナル遺跡については、その特徴として立地の特殊性をあげることができよう。先述したように、遺跡は玉島の平野から約2.5km入った遙照山山塊の標高240m程の尾根上に位置している。遺跡自体の性格については、将来の詳細な調査を待たなければならないが、今回採集された土器をみると確かに62や63のような器台形土器ないしは壺形土器といったものも含まれてはいるが、遺跡の立地や竪穴住居跡とも考えられる凹みの存在なども考え合わせると墳墓等の遺跡よりもむしろ集落遺跡の存在の方がより蓋然性が高いのではないだろうか。また今回のジョオゴナル遺跡から尾根づたいに約100m程はなれた、地元で岩甲(イワッコウ)とよばれる場所にもわずかながら弥生時代後期に属する土器片が出土する地点があり、周辺の標高200mを超える尾根一帯に遺跡の広がっていた可能性をうかがわせるのである。

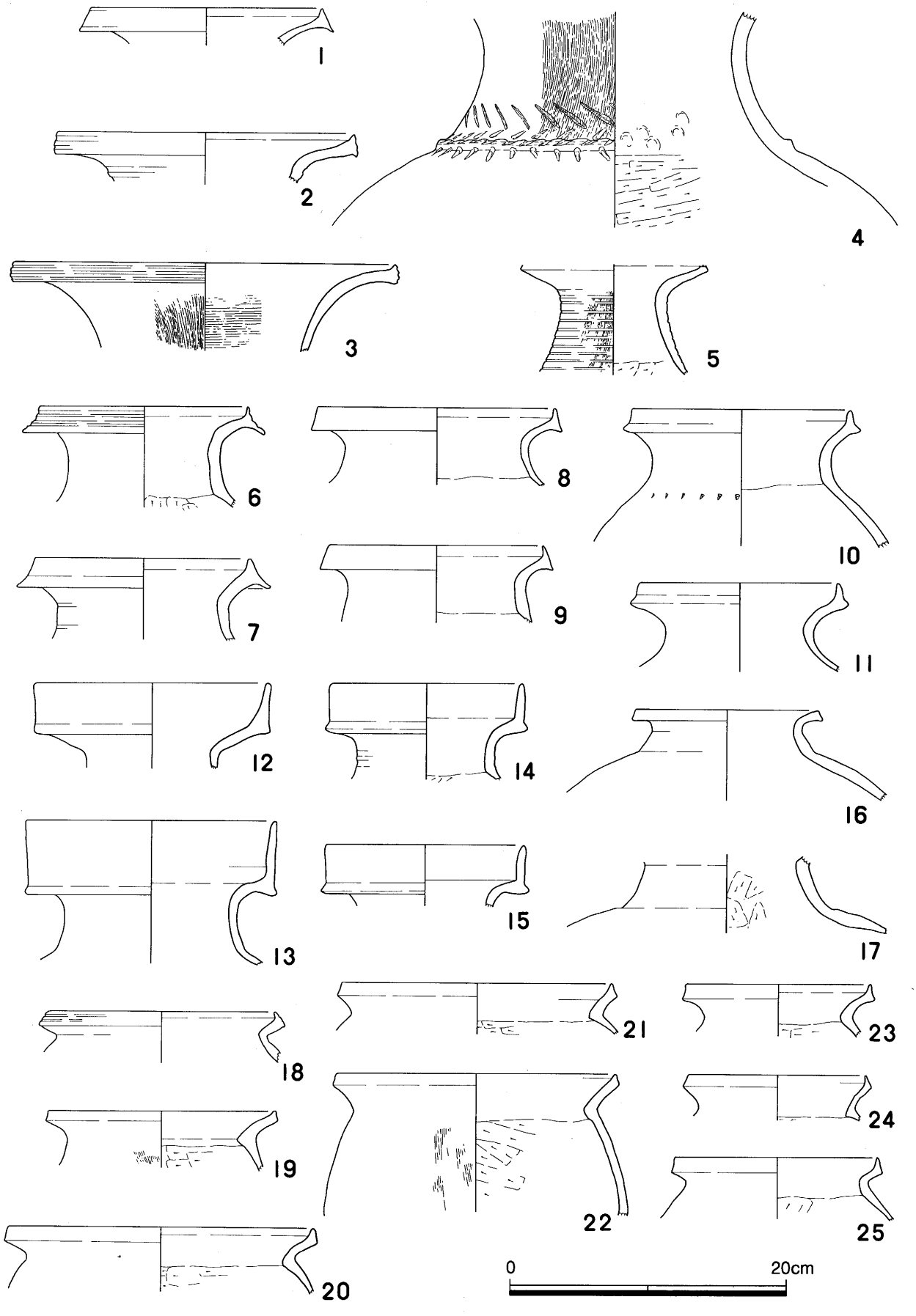
一般に、こうした低地での生産活動や居住条件を犠牲にして高所に立地する集落は、高地性集落としてとらえられており、当遺跡の場合も立地からすれば、当然この範疇に入るものと思われる。しかしながら、中部瀬戸内にみられるいわゆる高地性集落は、弥生時代中期後葉に集中して存在し、多くは中期末頃までには消滅してしまうといわれている[2]。今回の採集資料をみるかぎりジョオゴナル遺跡では時期的な幅はあるものの弥生時代後期に限定でき、岡山県内において後期に継続して存在する高地性集落は、岡山市の奥坂遺跡、同天神坂遺跡以外にはほとんど知られておらず[3]、その意味では注目すべき例といえ、今後詳しく検討していく必要があろう。

また、土器については、いずれも弥生時代後期に属するものであるが、その中でいくらかの時期的な差が認められる。すなわち、壺形土器の1・4・6・7、甕形土器の18、高杯形土器の51・52・57、器台形土器の61などは、内傾して上下に拡張する口縁をもち、端部に凹線文を施しているなど後期の中でも古式に属する特徴をもつもので、従来鬼川市Ⅰ式とされている時期に最も近いものであろう。また壺形土器の5や甕形土器の26～28、高杯形土器の53・54などは後期後半の中でとらえれるものである。また壺形土器の12～15や甕形土器の39～42あるいは脚台付きの鉢形土器72などは、ほぼ垂直に立ち上がる複合口縁をもつもので、北房町桃山遺跡[4]や同谷尻遺跡[5]などに類似した器形がみられ、山陰地方の影響を受けた山間部地方の特徴をもったものと考えられる。さらに、いわゆる丹塗り土器が各器種にわたって比較的多く認められる点なども山間部の特徴のひとつと考えられる。これらの土器はおおむね鬼川市Ⅲ式から才ノ町Ⅰ式にかけての時期に同種のものを見いだすことができる。

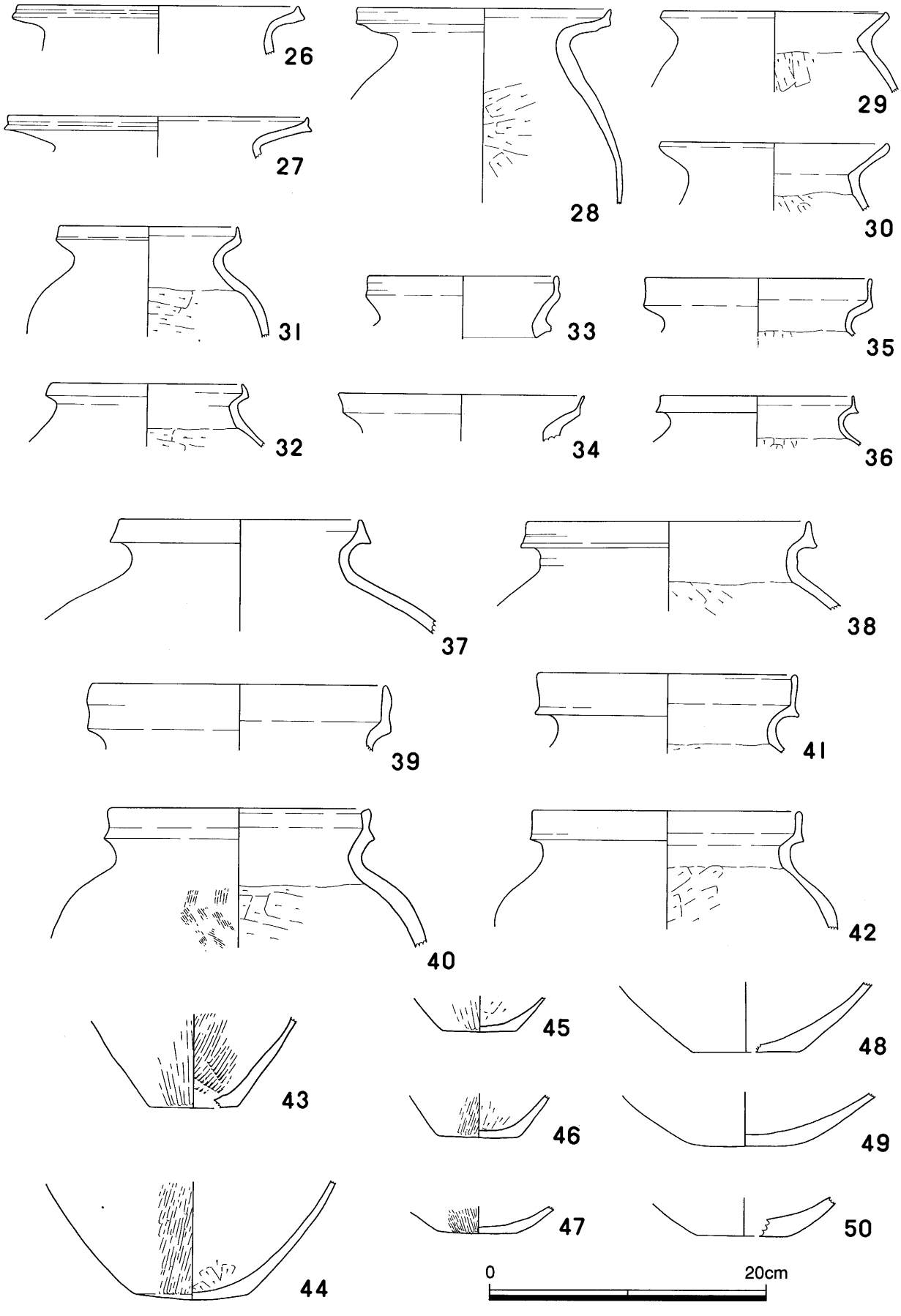
こうした土器の特徴は、当遺跡から北西に約4km程離れた山麓にある矢掛町白江遺跡でみられた土器群と非常によく似た様相を持っており、注目される。また時期的にみてもほぼ同じような変化をしており、白江遺跡では土器群にみられるこうした変化を白江Ⅰ式および白江Ⅱ式としてとらえている[6]。白江遺跡は、扇状地の上端に築かれた弥生時代後期の集落遺跡と考えられており東へ約150m離れた地点には30基におよぶ土壙墓が確認されている同時期の芋岡山遺跡[7]も知られている。高地に所在するジョオゴナル遺跡とそのいわば山麓に位置する白江遺跡や芋岡山遺跡との有機的な関連についても今後検討していく必要があると思われる。

なお、末筆ながら本報告に際し、所蔵資料の使用について快諾をいただいた花土進氏に感謝いたします。また当初より種々のご教示をいただいた中山頼夫氏をはじめ、「玉島を歩いて知る会」のメンバーの方々、ならびに当日現地をご案内いただいた花土弘氏、花土伊都子氏には大変お世話になりました。記して心より感謝いたします。

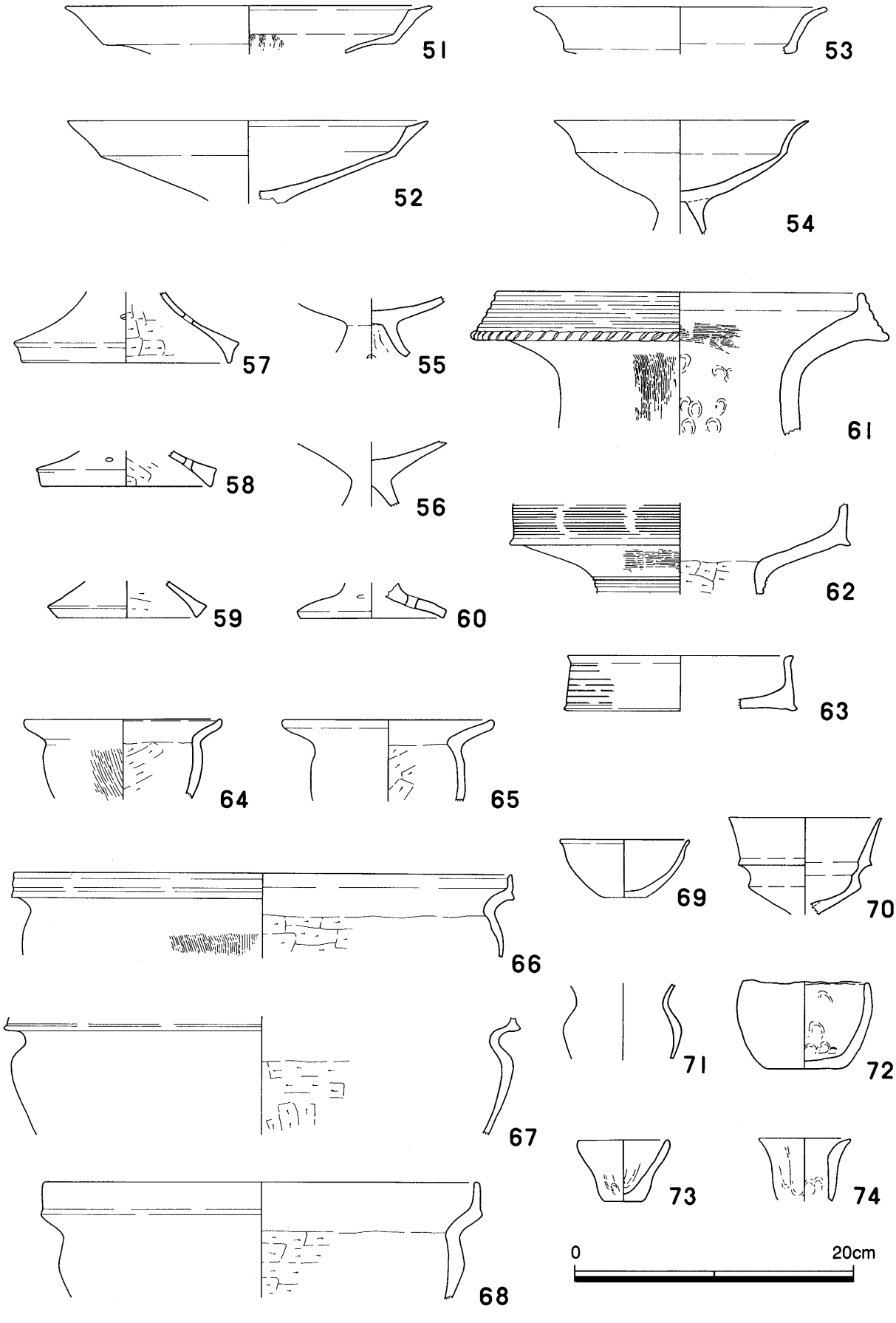
註（1） 中山頼夫氏のご教示による。
（2） 森格也 「瀬戸内と高地性集落」『吉備の考古学的研究（上）』 1992年
（3） 註（2）に同じ。
（4） 田仲満雄ほか 「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』 1976年
（5） 高畑知功ほか 「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』 1976年
（6） 間壁忠彦 「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報１』 1966年
（7） 間壁忠彦 「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報３』 1967年



出土土器 1（S＝1/4）


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
20cm

出土土器 2（S＝1/4）


51
53
52
54
57
55
61
58
56
62
59
60
63
64
65
69
70
66
71
72
67
73
74
68
0
20cm

出土土器 3（S＝1/4）

経寺山２号墳出土の須恵器（補遺）

藤原好二

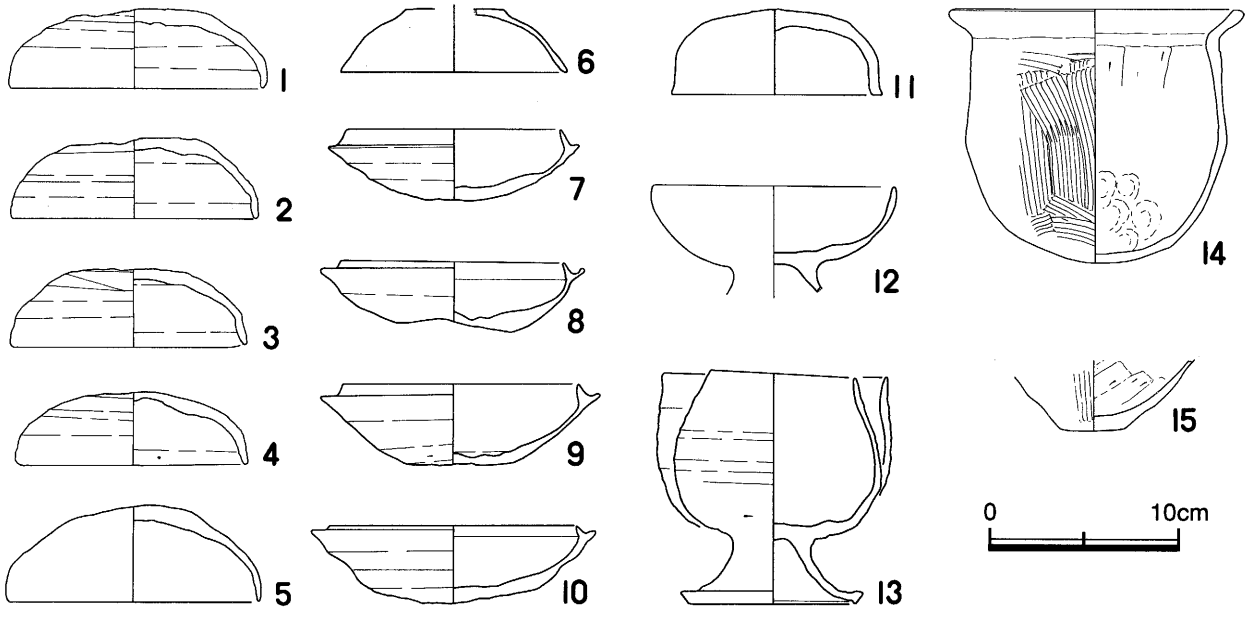
今回紹介する資料は、経寺山２号墳出土とされる遺物のうち、『倉敷埋蔵文化財センター年報１』[1]に紹介できなかったものである。器種としては、須恵器では杯蓋２点、杯身４点、壺の蓋・高杯・脚付碗各１点、そして土師器甕１点、弥生土器１点がある。『藤戸町誌』[2]で土師器のはち・さらとされているのは、それぞれ土師器甕、弥生土器であろう。これによって『町誌』に記載されている器種は金環を除いてすべて確認されたことになる。『センター年報１』で紹介したものをあわせると、須恵器は、杯蓋と杯身がそれぞれ６点、有蓋高杯、高杯、壺の蓋、直口壺、脚付碗、横瓶、提瓶がそれぞれ１点の計19点。土師器は甕１点である。その他のものとしては、弥生土器が１点ある。以下に観察結果を述べる。

杯蓋（１～６）

１～４は『センター年報１』で紹介したものであるが、図面が裏焼きで印刷されていたので今回訂正のため掲載したものである[3]。５は丸みを帯びた形状で径が約13cm程度、表面がかなり風化している。６は全体の５分の１が残存していただけなので、径は復元できなかった。２点とも口縁端部は丸くおさめており、外面の調整は、天井部外面にヘラケズリを施し、他は横ナデで仕上げている。ヘラケズリの方向は５が左回り、６が右回りである。内面の調整は基本的に横ナデだが、６にはナデの前の指押さえの痕跡が残っている。

杯身（7～10）

７・８は径が13～14cm程度で、８は器形にひずみがある。９・10は径が15cm前後でやや大き



出土遺物（S＝1/4）

い。外面調整は底部にヘラケズリの後、ナデで仕上げている。ヘラケズリは7が左回り、7～10は右回りである。内面調整は基本的に横ナデであるが、7・10は指押さえの跡と仕上げナデ、9には仕上げナデが認められる。

今回確認された資料によって杯身と杯蓋の数が同じとなったがセット関係は確認できなかった。

壺の蓋（11）

短頸壺等の蓋と考えられる。外面調整は天井部に左回りのヘラケズリ、他はナデである。内面調整は指押さえの後仕上げナデが施されている。

高杯（12）

脚部を欠損しているが、短脚のものと考えられる。杯部外面は底部がヘラケズリで、他はナデである。内面は横ナデである。口縁端部は丸くおさめている。

脚付碗（13）

碗部外面は底部が左回りのヘラケズリで、他は横ナデである。脚部は横ナデである。口縁部は故意に楕円形とされているようである。

土師器・弥生土器（14・15）

14は甕である。外反する口縁部をもつ丸底の器形である。口縁部の調整は内外面ともにナデ仕上げ。体部は内面にケズリ調整、外面にハケメ調整が施される。15は壺か甕の底部である。調整

5	7	8
9	10	11
12	13	14

は外面がヘラミガキで、内面はケズリである。底は狭い平底で古墳に伴うものではなく、弥生時代中期のものである可能性が高い。

須恵器の時期についてはほぼＴＫ209の範疇であり、『センター年報１』で紹介した資料と矛盾はない。土師器については14の年代は符合するが、15についてはおそらく混入品と考えられる。経寺山では１号墳墳丘で弥生時代と考えられる石鏃が採集されており、15もまったくの混入品というわけではなく、２号墳周辺で採集され、同じものとして保管された可能性もある。

本稿執筆にあたっては資料の所有者および倉敷市文化財保護審議会委員北村精三氏には多大のご教示・ご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝の意にかえさせていただきます。

註（１）　藤原好二「経寺山２号墳出土の須恵器」『倉敷埋蔵文化財センター年報１』　1994年
（２）『藤戸町誌』　藤戸町誌編集委員会　1955年
（３）　この他にも下記のような間違いが文章中にみつかったので、この場で訂正しておく。
P23下から2行目・誤：左回りの→正：右回りの
P24下から7行目・誤：右回りの→正：左回りの
P24下から4行目・誤：左回りの→正：右回りの

経寺山2号墳出土土器観察表

番号	種　類	法量(cm)	技法上の特徴	胎　土	色　調	焼成
5	杯蓋	口径　13.5 器高　5.1	外面天井部に左回りのヘラケズリ後ナデ　内面にナデ	１㎜大の長石を多く含む	内　5Y5/1　灰色 外　5Y4/1　灰色	良
6	杯蓋	口径　－ 器高　3.4	外面天井部に右回りのヘラケズリ後ナデ　内面に指押え後ナデ	0.5㎜大の長石を多く含む	内　5Y6/1　灰色 外　N6/　灰色	良
7	杯身	口径　11.3 最大径 13.2 器高　3.8	外面に左回りのヘラケズリ後ナデ 内面に指押え後仕上げナデ	0.5㎜大の長石を含む	内　N4/ 外　7.5YR6/1　褐灰色	良
8	杯身	口径　11.7 最大径 14.0 器高　3.6	外面に右回りのヘラケズリ後ナデ 内面にナデ	0.5～１㎜大の長石・１㎜前後の石英を含む	内　2.5YR4/1　赤灰色 外　2.5YR5/1　赤灰色	良
9	杯身	口径　12.3 最大径 14.8 器高　4.4	外面に右回りのヘラケズリ後ナデ 内面にナデ後仕上げナデ	0.5～１㎜大の長石・１㎜前後の石英を含む	内　2.5YR8/2　灰白色 外　2.5YR7/2　灰黄色	やや不良
10	杯身	口径　12.9 最大径 15.0 器高　4.1	外面に右回りのヘラケズリ後ナデ 内面に指押え後仕上げナデ	0.5～３㎜大の長石・１㎜前後の石英を含む	内　7.5Y7/1　灰白色 外　10YR6/1　褐灰色	良
11	蓋	口径　11.2 器高　4.5	天井部に左回りのヘラケズリ後ナデ 内面に指押え後仕上げナデ	0.5～１㎜大の長石を含む	内　5Y5/1　灰色 外　2.5Y7/3　浅黄色	良
12	高杯	口径　12.9 残存高　5.7	杯底部にヘラケズリ後ナデ その他はナデ	１㎜大の石英を含む	内　5GY8/1　灰白色 外　7.5Y8/1　灰白色	良
13	脚付碗	口径　7.6 最大径 11.8 脚径　9.7 器高　12.3	碗底部に左回りのヘラケズリ後ナデ その他はナデ	0.5～１㎜大の長石を含む	内　N5/　灰色 外　10YR4/1　褐灰色 脚内N5/　灰色	良
14	土師器甕	口径　15.5 器高　13.4	外面は胴部にタテハケ　頸部と底部はヨコハケ　口縁部はナデ　内面はヘラケズリ後底部にユビオサエ	0.5～１㎜大の長石・１㎜前後の石英を含む	内　2.5YR4/3　赤褐色 外　2.5YR4/4　赤褐色	良
15	弥生土器	－	外面は縦方向のヘラミガキ 内面はケズリ	１㎜大の石英・長石を含む	内外　5YR5/6　明赤褐色	良

（色調は『新版標準土色帳』1995年後期版による）

V　寄贈図書一覧（95.4.1 ～ 96.3.31）

【北海道　01】	
苫小牧市埋蔵文化財調査センター	とまこまい埋文だより　No.37～39、大昔の苫小牧　-よみがえる古代人のくらし-、苫小牧の埋蔵文化財　No.6　［装身具編］、苫小牧の埋蔵文化財　No.7　［落し穴編］、苫小牧の埋蔵文化財　No.8　［石器編］、苫小牧市柏原27・ニナルカ・静川5・6遺跡・発掘調査概要報告書、苫小牧市美沢10遺跡発掘調査概要報告書、苫小牧市美沢10遺跡発掘調査概要報告書　-平成7年度-、苫小牧市美沢東遺跡群発掘調査概要報告書Ⅱ、苫小牧市美沢東遺跡群発掘調査概要報告書Ⅲ
【青森県　02】	
青森県埋蔵文化財調査センター	三内丸山遺跡「応援メッセージ」集、埋文あおもり　第14号
【岩手県　03】	
(財) 岩手県文化振興事業団	発掘された北の都　-800年の時を越え解き明かされた平泉藤原氏の館跡-
北上市立埋蔵文化財センター	北上市埋蔵文化財年報（1989年度）、北上市埋蔵文化財年報（1992年度）、上大谷地遺跡、藤沢遺跡（Ⅱ）、樺山遺跡、国見山廃寺跡発掘調査概報　第61集、国見山廃寺跡発掘調査報告、成田遺跡（Ⅰ）、二子地区遺跡群詳細分布調査報告書、浮牛城跡、馬場野遺跡、成田遺跡（Ⅱ）、森下遺跡、本宿遺跡、北上遺跡群、飯島遺跡
(財) 水沢市埋蔵文化財調査センター	胆沢城　-平成6年度発掘調査概報-、柳沢館遺跡、水沢遺跡群範囲確認調査、石田Ⅱ遺跡、常盤広町遺跡　-東部地区の発掘調査-、姉体車堂Ⅱ遺跡、常盤小学校遺跡
和賀町教育委員会	和賀仙人遺跡発掘調査報告書
江釣子町教育委員会	江釣子遺跡群
【宮城県　04】	
多賀城市埋蔵文化財調査センター	高崎遺跡　-第11次調査報告書-、山王遺跡・市川橋遺跡、山王遺跡-第17次調査-出土の漆紙文書、野田館跡　-第1次発掘調査報告書-
【秋田県　05】	
青森県埋蔵文化財調査センター	秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　第10号、秋田県埋蔵文化財センター年報　13、古野遺跡、寒沢遺跡、中の沢遺跡、家の下遺跡（1）、払田柵跡　-第102次調査-、遺跡詳細分布調査報告書
【山形県　06】	
米沢市教育委員会	米沢市文化財年報　No.8、遺跡詳細分布調査報告書　第8集、一ノ坂遺跡発掘調査概報　第5集、矢子山城跡　第2集、我妻館跡発掘調査報告書、直江石堤発掘調査報告書　第Ⅱ集
【福島県　07】	
(財) 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	研究紀要　第1号
(財) いわき市教育文化事業団	いわき市教育文化事業団　年報5・6、文化財ニュースいわき　第47号
(財) 福島市振興公社	南諏訪原遺跡、宇輪台遺跡、茶畑Ａ遺跡発掘調査報告、宮畑遺跡発掘調査報告、屶振Ｂ遺跡・下ノ平Ｅ遺跡、摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ、倉ノ前遺跡、勝口前畑遺跡、月崎Ａ遺跡・月崎Ｃ遺跡・高館跡、月崎Ａ遺跡（第10・15・17・18次調査）、摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査概要Ⅳ
【茨城県　08】	
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター	ひたちなか市埋蔵文化財調査センター年報　第1号、ひたちなか埋文だより第3号
(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社	フィールドノート　Vol. 7、見てみよう聞いてみよう！その3・その4、武田Ⅷ　-1994年度武田遺跡群発掘調査の成果-

土浦市立博物館	土浦市立博物館紀要　第6号
上高津貝塚ふるさと歴史の広場	霞ヶ浦、縄文土器の一生 - 縄文人の技術を探る -
【栃木県　09】	
(財) 栃木県文化振興事業団	研究紀要　第3号、栃木県文化振興事業団年報　- 平成6年度 -、埋蔵文化財センター年報　第5号 (平成7年度)、やまかいどう　No.12、栃木県埋蔵文化財センター通信 No.12 十三塚遺跡、小佐越遺跡、谷館野東・谷館野西・上芝遺跡、鶴田中原遺跡、寺野東遺跡、猿渕遺跡、下野国分寺跡　XI、那須官衙関連遺跡　II、長福城跡、乙畑・大久保古墳群、金山遺跡III、横倉宮ノ内遺跡、塙平遺跡　II、槻沢遺跡　II、馬門南遺跡、谷近台遺跡、横倉遺跡
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財保護行政年報　17　- 平成5年度 -、下野国分寺跡　IV
佐野市教育委員会	向原遺跡、若宮遺跡、摘田遺跡・宮西遺跡、馬門南遺跡・馬門愛宕塚古墳
足利市教育委員会	平成5年度埋蔵文化財発掘調査年報、西場古墳群第1次発掘調査報告書、法界寺跡発掘調査概要、平成6年度埋蔵文化財発掘調査年報
【群馬県　10】	
(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団	レールの下の歴史、遺跡に学ぶ　第6号、研究紀要　12、資料管理取扱要領　- オンライン対応　初版 -、二之宮谷地遺跡、南蛇井増光寺遺跡　III、白倉下原・天引向原遺跡II　- 縄文時代編 -、飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡、下高瀬上之原遺跡、荒砥大日塚遺跡、中山与惣平衛塚遺跡、黒熊栗崎遺跡、下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡、内匠日向周地遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡、小角田前I・II遺跡、中高瀬観音山遺跡
【埼玉県　11】	
埼玉県立埋蔵文化財センター	埼玉県立埋蔵文化財センター年報4、埋文さいたま　第19号・21号・22号
所沢市立埋蔵文化財調査センター	市内遺跡群調査報告書　1、下安松遺跡 (第2次)・美園上遺跡 (第3次)・吉野遺跡 (第6次)、東の上遺跡、東の上遺跡、大堀山館跡
飯能市教育委員会	飯能の遺跡 (18)・(19)
鶴がヶ島市教育委員会	一天狗遺跡、新右衛門遺跡、仲道柴山遺跡 (1～4次)・俗称金塚　かな古墳、鶴ヶ島市内遺跡発掘調査報告書　I
全国埋蔵文化財法人連絡協議会事務局	全国埋蔵文化財法人連絡協議会の便覧、全国埋文協会報 No.42・43
【千葉県　12】	
(財) 印旛郡市文化財センター	新地遺跡第1地点、井ノ崎台遺跡II、臼井台大名宿遺跡、獅子穴II遺跡、臼井屋敷跡遺跡、木村留古墳群7・8号墳、石川阿ら地遺跡、上野遺跡・出口遺跡発掘調査報告書、高岡遺跡群III、高岡遺跡群IV、一之綱I・鉄砲作遺跡発掘調査報告書、木戸先遺跡、印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書、上福田向台遺跡発掘調査報告書、公津東遺跡群II、宮内遺跡発掘調査報告書、大蛇石橋台遺跡発掘調査報告書
(財) 長生郡市文化財センター	長生郡市文化財センター年報　No.8　- 平成4年度 -、徳増下谷遺跡、台遺跡、堀口横穴墓、和合遺跡、田向遺跡、中原遺跡、宮島遺跡、押日遺跡群、要害遺跡・要害城跡
(財) 山武郡市文化財センター	財団法人山武郡市文化財センター年報　No.10、文化財かわら版　第4号・5号、砂田中台遺跡、道塚横穴・ヤグラ群、居合台遺跡、山中台遺跡
(財) 市原市文化財センター	10年の軌跡、市原市文化財センター研究紀要　III、市原市文化財センター年報　- 平成2年度 -、市原市文化財センター年報　- 平成3年度 -、私たちの文化財　22、市原市上総国府推定地確認調査報告書 (1)、市原市姉崎東原遺跡C地点、市原市能満上小貝塚、市原市郡本遺跡 (第2次)、市原市中高根南名山遺跡
(財) 千葉県文化財センター	千葉県文化財センター年報　No.20、房総の文化財　Vol. 7・8
市川市教育委員会	下総国分寺遺跡第42地点 (その2)
船橋市教育委員会	本郷台遺跡　- 第6次発掘調査報告書 -

野田市教育委員会	平成5年度野田市内遺跡発掘調査報告、平成6年度野田市内遺跡発掘調査報告、埋蔵文化財調査概要Ⅳ、上野馬込遺跡第6・7次調査報告書、下山遺跡、上野馬込遺跡第5次調査報告書、平成6年度不特定遺跡発掘調査報告書
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究年報　3、国立歴史民俗博物館研究報告　第60・64集、歴博　70、旧高旧領取調帳データベース、土偶データベース、日本荘園データ1・2
千葉市立加曾利貝塚博物館	「北の貝塚から」、貝塚博物館紀要　第22号、縄文土器のつくり方、陸奥の貝塚　-新たな展開-
市立市川考古博物館	下総国分寺　-いま見つめなおす下総の天平文化-、市立市川考古博物館年報第21・22号
千葉県立中央博物館	千葉県立中央博物館研究報告-人文科学-　第4巻第1号
東邦考古学研究会	東邦考古　19
【東京都　13】	
(財) 東京都教育文化財団	縄文中期・多摩のむら
宮内庁書陵部陵墓課	舒明天皇押坂内陵の墳丘遺構・履中天皇百舌鳥耳原南陵の墳丘外形及び出土品
地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会	和泉伯太藩上屋敷跡、牛込御門外橋詰、江戸城外堀跡　赤坂御門・喰違土橋
港区立港郷土資料館	研究紀要3　-平成6年度-、港郷土資料館館報　-13-、資料館だより　第27・28号、芝新銭座町御高札物揚場諸事記録、狸穴坂下の武家屋敷跡遺跡、陸奥八戸藩南部武家屋敷遺跡発掘調査報告書　Ⅰ
日本製鋼所遺跡調査会	武蔵国府関連遺跡調査報告　-遺構図版編-、-遺構・遺物別表編-、-遺物図版編-、-遺物図面編-、-遺構図面編-、-本文編-
都立府中病院内遺跡調査会	武蔵台遺跡Ⅱ　-資料編1-、-資料編2-、-資料編3-、-資料編4-、-資料編5-、武蔵台遺跡Ⅲ
青山学院大学文学部史学研究室	森台遺跡群の調査（第2次）、青山考古　第12号、青山史学　第十四号
【神奈川県　14】	
(財) かながわ考古学財団	甦る池子の歴史　-逗子市池子遺跡群発掘調査の成果-
神奈川県立埋蔵文化財センター	謎の敷石住居、眠りからさめた古代　-第一東海自動車道遺跡発掘調査成果展-、神奈川の考古学の諸問題（Ⅱ）
横須賀市教育委員会	三浦半島、葉山群層（1500万年前）の断層破砕帯から発見された化学合成生物群、吉井貝塚を中心とした遺跡　史跡整備報告書、埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅲ、小原第1遺跡、小荷谷遺跡、田戸遺跡、蓼原東遺跡
平塚市教育委員会	根坂間横穴群第3地点、平塚市文化財調査報告書　第30集、山王B・大会原遺跡他、真土六の域遺跡Ⅱ、五領ヶ台遺跡　-第9地点-
【富山県　16】	
(財) 富山県文化振興財団	埋蔵文化財年報(6)　-平成6年度-、能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告　-NEJ-08遺跡-
富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター年報　-平成6年度-、米作りの始まり、埋文とやま第47～51号
富山県［立山博物館］	たてはく　第12～14号、研究紀要　Vol. 2、富山県［立山博物館］年報　第4号
【石川県　17】	
金沢市教育委員会	平成6年度金沢市埋蔵文化財調査年報
金沢大学文学部考古学研究室	金沢大学考古学紀要　第22号
金沢大学資料館	金沢大学資料館だより　No.7
【山梨県　19】	
山梨県埋蔵文化財センター	研究紀要　11、年報11　-平成6年度-、日影田遺跡（第1・2次調査）、宮沢中村遺跡、大師東丹保遺跡　2、村前東A遺跡概報　2、十五所遺跡、山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書、宮の前遺跡、兄川、経塚古墳、城下・原田

	遺跡、天神遺跡
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより　No.33～35
【長野県　20】	
(財) 長野県埋蔵文化財センター	赤い土器のクニ、長野県埋蔵文化財センター年報　10・11、長野県埋蔵文化財ニュース　No.39～41
長野市埋蔵文化財センター	長野市埋蔵文化財センター所報　No.4～6、和田東山古墳群、松原遺跡Ⅲ、猪平遺跡・宮ノ下遺跡、宮西遺跡、本村東沖遺跡Ⅱ
辰野町教育委員会	新町原田南遺跡、堀の内中世居館跡をめぐって
長野県立歴史館	長野県立歴史館　研究紀要　第1号、長野県立歴史館たより　Vol. 2　春号・Vol. 3　夏号・Vol. 4　秋号・Vol. 5　冬号
【岐阜県　21】	
(財) 岐阜県文化財保護センター	きずな　第13～15号、戸入村平遺跡、長吉遺跡・普賢寺跡、仲迫間遺跡
各務原市埋蔵文化財調査センター	かかみがはらの埋文　第3号、北山遺跡B・C地区発掘調査報告書
岐阜市教育委員会	文化財グラフ「ぎふ」　第15号、御望遺跡、岐阜市遺跡詳細分布調査報告書、平成7年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書、平成5～7年度岐阜市埋蔵文化財調査報告書、岐阜市の埋蔵文化財　-平成6年度-、寺田遺跡
【静岡県　22】	
磐田市埋蔵文化財センター	近江　堂山古墳、後山古墳群　-第3次発掘調査報告書-、御殿・二之宮遺跡　-第17次発掘調査報告書-、御殿・二之宮遺跡　第6次発掘調査報告書、国分寺・国分台遺跡発掘調査報告書、中半場遺跡発掘調査報告書、長江崎遺跡第5次・第6次発掘調査報告書、匂坂下原古墳群　第5次発掘調査報告書、梵天古墳群・匂坂中志下4遺跡発掘調査報告書
静岡市立登呂博物館	静岡市立登呂博物館館報　5　-平成6年度-、戦後の暮らし50年　-静岡市大谷　神谷定吉のカメラアングル-、登呂の弥生人　3　-体験して学ぶ古代農村の暮らし-
【愛知県　23】	
(財) 愛知県埋蔵文化財センター	10年のあゆみ　-創立10周年記念誌-、愛知県埋蔵文化財情報　10、朝日遺跡への招待、年報　-平成6年度-、埋蔵文化財愛知　No.41～43、清洲城下町遺跡Ⅴ、牛ノ松遺跡、島田陣屋遺跡、吉田城遺跡Ⅱ、名古屋城三の丸遺跡（Ⅴ）、川地遺跡、刀池古窯跡群
一宮市博物館	一宮の文化財、一宮の名宝（Ⅳ）、一宮市博物館だより　第18～20号、漁の技術史　-木曽川から伊勢湾へ-、田所遺跡と光明寺　-大溝と墳墓堂-、法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書
南山大学人類学博物館	南山大学人類学博物館館報　第26～32号、入海貝塚の入海式土器、正家廃寺発掘調査報告書
名古屋市見晴台考古資料館	古沢町遺跡発掘調査概要報告書、高蔵遺跡　第6次調査の概要、志賀公園遺跡第2次発掘調査概要報告書、春日野町遺跡発掘調査の概要、石神遺跡・玉ノ井遺跡・高倉遺跡（第7次）発掘調査報告書、扇田町遺跡　-発掘調査の概要-、名古屋市見晴台考古資料館　年報12
豊田市郷土資料館	豊田市郷土資料館だより　No.14・15、京ヶ峰1号墳・谷下古墳、西川1・2号窯址、梅坪遺跡Ⅱ、池ノ表古墳
名古屋大学文学部考古学研究室	考古資料ソフテックス写真集　第10集、名古屋大学文学部研究論集122
【三重県　24】	
三重県埋蔵文化財センター	'94発掘三重、みえ　No.16～18、一般国道23号中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ、一般国道42号松阪・多気バイパス　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ、一般国道475号東海環状自動車道　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ、考古資料にみる津とその周辺、三重県埋蔵文化財年報　糀屋垣内遺跡、門脇北古墳発掘調査報告、一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査報告　自然科学編Ⅰ、西岡古墳発掘調査報告、南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告、六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡・高塚宅跡・東川遺跡、大薮遺跡発掘調査報告（D地区）、西横尾遺跡、

	高座遺跡発掘調査報告、平生遺跡発掘調査報告、昭和63年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告　-第2分冊-
津市埋蔵文化財センター	津の埋蔵文化財ハンディマップ、埋文センターニュース　創刊号・第2号、六大B遺跡・大古曽遺跡発掘調査報告
鈴鹿市教育委員会	伊勢国分寺・国府跡　2、第4回鈴鹿市埋蔵文化財展　-最近の調査から-、鈴鹿市埋蔵文化財調査年報　II
松阪市教育委員会	浅間古墳群発掘調査報告書、白山古墳群発掘調査報告書
上野市教育委員会	上野市埋蔵文化財年報　1
嬉野町教育委員会	天白ムラの物語　-中村川の縄文集落-、上野廃寺発掘調査報告書
上野市遺跡調査会	森脇遺跡発掘調査報告、西蓮寺墓所発掘調査報告、大多田遺跡発掘調査報告(2次)、小芝遺跡発掘調査報告、森永「エンゼルの森」開発区域内埋蔵文化財範囲確認調査報告書、小芝遺跡発掘調査報告（2次)、伊賀国府跡発掘調査報告
【滋賀県　25】	
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース　No.180～191号、石の文化史　-くらしの道具から石仏まで-
大津市教育委員会	大谷南遺跡発掘調査報告書
長浜市教育委員会	長浜市埋蔵文化財調査ニュース　第47～52号、地福寺遺跡・塚町遺跡、墓立遺跡Ⅰ、地福寺遺跡・塚町遺跡発掘調査報告書、大塚遺跡、堀部西遺跡発掘調査報告書、長浜文化財ファイル　9～15
滋賀県教育委員会	加茂遺跡・一ノ坪遺跡発掘調査報告書、鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ
琵琶湖博物館開設準備室	瓦BAN　第7～9号・特別号、丸子船の復元　-琵琶湖最後の帆走木造船-
滋賀県立安土城考古博物館	おおてみち　第11～14号
大津市歴史博物館	大津市歴史博物館年報　-平成6年度-、大津歴博だより　No.23・24
(財) 滋賀県文化財保護協会	滋賀文化財だより　No.205～217、滋賀文化財教室シリーズ　〔149〕～〔152〕
坂田郡社会教育研究会文化財部会	佐加太　創刊号・第1～3号
【京都府　26】	
(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター	京都府埋蔵文化財情報第　55号～68号
(財) 京都市埋蔵文化財研究所	平成3年度　京都市埋蔵文化財調査概要、平成4年度　京都市埋蔵文化財調査概要、平安宮Ⅰ
京都市埋蔵文化財調査センター	京都市内遺跡試掘調査概要　-平成6年度-、京都市内遺跡発掘調査概報　-平成6年度-、京都市内遺跡立会調査概要　-平成6年度-
加悦町教育委員会	滝岡田古墳、明石裏ノ谷遺跡・入谷西D1号墳
京都市考古資料館	リーフレット京都　No.71～No.78
京都大学文学部考古学研究室	琵琶湖周辺の6世紀を探る
花園大学文学部考古学研究室	妙心寺旧塔実相院跡調査報告
【大阪府　27】	
(財) 大阪市文化財協会	長原塚ノ本古墳とその周辺
(財) 八尾市文化財調査研究会	平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
(財) 枚方市文化財研究調査会	ひらかた文化財だより　第23～26号、枚方市文化財年報　14・15
高槻市立埋蔵文化財調査センター	マンガで案内するハニワ工場公園、高槻市文化財年報　平成5年度、嶋上遺跡群19、芥川遺跡発掘調査報告書、「ハニワ工場公園」新池埴輪製作遺跡整備事業報告書
堺市立埋蔵文化財センター	堺市文化財調査概要報告　第48～53冊、堺埋蔵文化財だより　第8号
(財) 大阪府埋蔵文化財調査研究センター	発掘速報展　大阪'96
豊中市教育委員会	しょうじ幼稚園東側側壁を中心とした地質調査報告書、豊中市埋蔵文化財年報　Vol.3　-1993年度-、豊中市埋蔵文化財発掘調査概要、行きかう人びと　-うつりゆくとよなか弥生人の世界-　とよなか文化財ブックレットNo4　通史

	編Ⅳ
枚方市教育委員会	飛鳥・奈良時代の河内と大和、枚方市埋蔵文化財発掘調査概要　1994
富田林市教育委員会	錦織南遺跡、錦織南遺跡Ⅱ、中佐備須恵器窯跡発掘調査概要、平成3年度　富田林市内遺跡群発掘調査概要、平成4年度　富田林市内遺跡群発掘調査概要、喜志西遺跡発掘調査概要Ⅱ、平成5年度　富田林市内遺跡群発掘調査概要、甲田南遺跡、富田林市内遺跡群発掘調査報告書　-平成6年度-
貝塚市教育委員会	堀新遺跡発掘調査概要、津田遺跡発掘調査概要、貝塚市遺跡群発掘調査概要17
泉南市教育委員会	古代の技術革新　-日本古代国家の成立を探る・Ⅱ-、泉南市文化財年報No.1　-昭和57年度～平成5年度-、仏教の受容と古代国家　-日本古代国家の成立を探る・Ⅲ-、泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ、岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書、泉南市山間部言語調査報告、泉南市信達葛畑・信達楠畑地区民俗資料調査報告
堺市教育委員会	堺環濠都市遺跡・長塚古墳・大塚山古墳・塔塚古墳他・鳳東町遺跡
大阪府立弥生文化博物館	平成6年度　埋蔵文化財緊急発掘調査概報・弥生倶楽部　Vol. 8、弥生文化博物館要覧　-平成6年度-、弥生人の食卓　-米食事始め-、邪馬台国への海の道　-壱岐・対馬の弥生文化-
大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館常設展示図録・博物館だより-アスカディア・古墳の森　Vol. 2～3、「鏡の時代-銅鏡百枚-」、古代人名録　-戸籍と計帳の世界、古代の群像　-俑と埴輪-
大阪市立博物館	大阪市立博物館報　No.34
吹田市立博物館	吹田市文化財ニュース　No.16、水辺の文化の再発見　-鴨にみる人と自然-、博物館だより　No.4、博覧会の風景　-ＥＸＰＯ’70から25年-
八尾市立歴史民俗資料館	絵はがきに見る大正・昭和の世相、研究紀要　第6号
大阪大学文学部考古学研究室	日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究
【兵庫県　28】	
兵庫県教育庁　埋蔵文化財調査事務所	ひょうごの遺跡　第18号・19号、上構遺跡
神戸市埋蔵文化財センター	海辺の古墳、上沢遺跡発掘調査報告書、西求女塚古墳、青銅鏡　-卑弥呼から浮世絵まで-、地下に眠る神戸の歴史展　X、平成4年度　神戸市埋蔵文化財年報
姫路市教育委員会	御旅山13号墳
三田市教育委員会	三田文化財情報　平成6年度合冊号・手づくりの歴史①　焼く・葬る・眠る　-陶棺-
加西市教育委員会	横田遺跡、渡遺跡、畑町の歴史
赤穂市教育委員会	津村古墳
龍野市教育委員会	尾崎遺跡Ⅱ、養久山・前地遺跡
加東郡教育委員会	埋蔵文化財調査年報　-1992年度-
上郡町教育委員会	ふるさと高田　第7集　-神子田遺跡復元の記録-、井の端遺跡とその時代、上郡の文化財　-国・県・町指定文化財-
中町教育委員会	貝野前遺跡、安坂・北山田遺跡、坂本・丁田遺跡、多哥寺遺跡
太子町教育委員会	石棺の調査Ⅰ・太子町埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表、南柳遺跡の調査
神戸市立博物館	博物館だより　No.51
兵庫県立歴史博物館	館報　1994、兵庫歴博ニュース　No.50、兵庫の弥生土器
芦屋市立美術博物館	なりひら　第17～19号
播磨町郷土資料館	館報　Vol. 6　-平成6年度-、ふるさとの学校のあゆみ
(財) 辰馬考古資料館	考古資料図録、展覧の栞　10～20
【奈良県　29】	
奈良国立文化財研究所	遺跡探査　ニュースレター　合冊（No.1～No.10)、埋蔵文化財ニュース No.78～No.80

奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要　1994、奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 -平成6年度-、平城京東市跡推定地の調査Ⅷ
桜井市立埋蔵文化財センター	三輪と出雲、纒向のマツリ、纒向型前方後円墳とそのひろがり　- 関東編 -
奈良大学文化財学科考古学研究室	文化財学報　第十二集・十三集
【和歌山県　30】	
(財) 和歌山市文化体育振興事業団	和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報１　-1988・1989年度-、和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報２　-1990・1991年度-、鳴神Ⅵ遺跡　第4次発掘調査概報、鳴神Ⅵ遺跡　第6次発掘調査概報、太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報
(財) 和歌山県文化財センター	根来寺坊院跡、西庄遺跡発掘調査Ⅰ、川辺遺跡発掘調査報告書
【鳥取県　31】	
(財) 鳥取県教育文化財団	鳥取埋文ニュース　No.41～No.43、大下畑遺跡、百塚第5遺跡・小波狭間谷遺跡・泉上経前遺跡、百塚第7遺跡（8区）、尾高御建山遺跡Ⅱ・尾高古墳群Ⅱ・尾高1号横穴墓、鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡
(財) 鳥取市教育福祉振興会	山ヶ鼻遺跡、平成6年度　桂見遺跡発掘調査報告書、六部山古墳群　Ⅱ
鳥取市教育委員会	平成6年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書
倉吉市教育委員会	長谷遺跡発掘調査報告書、倉吉市内遺跡分布調査報告書　Ⅷ、古神宮古墓発掘調査報告書、二夕子塚遺跡発掘調査報告書、不入岡遺跡群発掘調査概報
北条町教育委員会	町内遺跡発掘調査報告書第4集、曲第1遺跡発掘調査報告書（曲岡遺跡）第1集、曲古墳群発掘調査報告書第2集　曲226号墳
羽合町教育委員会	長瀬高浜遺跡緊急発掘調査報告書
【島根県　32】	
島根県埋蔵文化財調査センター	遺跡が語る古代の安来、塩津山1号墳、原の前遺跡、島根県埋蔵文化財調査センターニュース　11号、平ラⅡ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群、陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡、才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館	八雲立つ風土記の丘　No.131～No.133
島根大学埋蔵文化財調査研究センター	島根大学構内遺跡（橋縄手地区）発掘調査概報Ⅰ
【岡山県　33】	
岡山県古代吉備文化財センター	所報吉備　第18号・19号、南溝手遺跡　1、米田遺跡、下長田上野古墳群・上野遺跡、中国横断自動車道建設に伴う発掘調査　2、足守川河川改修工事に伴う発掘調査、百間川原尾島遺跡　4、津寺遺跡　2、松尾古墳群・斎富古墳群・馬屋遺跡ほか
津山弥生の里文化財センター	津山弥生の里　第2号・第3号、河辺上原遺跡、野村高尾遺跡、美作国府跡　-日本生命社宅新築に伴う発掘調査-、長畝山北11号墳
岡山県教育委員会	岡山県埋蔵文化財報告　25
岡山市教育委員会	足守藩武家屋敷跡
備前市教育委員会	備前市の文化財
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財調査年報5　（平成6年度）、石原後遺跡
山陽町教育委員会	南方前池遺跡
大原町教育委員会	川戸古墳群発掘調査報告書
津山郷土博物館	博物館だより　No.13・14、美作国府跡　-埋もれた古代の役所
倉敷市立自然史博物館	自然史博物館だより　No.18～20、倉敷市立自然史博物館研究報告　第10号、宇野確雄植物コレクション(4)
岡山県立美術館	美術館ニュース　No.31・No.32
岡山県立吉備路郷土館	吉備路郷土館だより　No.18
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡調査研究年報12　-1994年度-、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第13号・14号、津島岡大遺跡5　-第8次調査-、津島岡大遺跡6　-第6・7次調査-
就実女子大学吉備地方文化研究所	吉備地方文化研究　第7号

岡山理科大学	自然科学研究所研究報告　第20号、岡山理科大学紀要　第30号Ａ　自然科学、岡山理科大学紀要　第30号Ｂ　人文・社会科学
岡山市立オリエント美術館	岡山市立オリエント美術館研究紀要　13
岡山県総合文化センター	岡山県総合文化センターニュース　No.375
岡山県遺跡保護調査団事務局	調査団ニュース　第8～10号
高梁川の水と緑を守る会	高梁川流域の自然　第12～14号
倉敷の自然を守る会	倉敷の自然　第58～61号
寄島町誌編さん委員会	寄島町誌
倉敷市立自然史博物館友の会	しぜんしくらしき　No.13・No.14、友の会ニュース　44号
矢藤治山弥生墳丘墓	矢藤治山弥生墳丘墓
【広島県　34】	
(財) 広島県埋蔵文化財調査センター	ひろしまの遺跡　第61～64号、研究輯録　Ⅴ、年報　Ⅹ　-平成5年度-、中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅲ)、中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅳ)、寺側古墳、松谷1・2号古墓発掘調査報告書、郡山城下町遺跡、耳木第1号たたら跡・持丸川西たたら跡
(財) 東広島市教育文化振興事業団	阿岐のまほろば　Vol. 1～Vol. 4、高屋東1号遺跡発掘調査報告書、田中遺跡発掘調査報告書、五反田遺跡発掘調査報告書、諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書
(財) 吉田町地域振興事業団	郡山城跡周辺遺跡、山之助古墓、石原余谷1号遺跡
広島県教育委員会	いぶき　No.10・No.11、冠遺跡群Ⅳ、広島県中世城館遺跡総合調査報告書　第3集、中世からのメッセージ　-吉川元春館跡第1次発掘調査概要-、広島県の埋蔵文化財　-平成5年度事業の概要-、史跡吉川氏城館跡　小倉山城跡
庄原市教育委員会	堺谷鍛冶跡
尾道市教育委員会	尾道遺跡　-市街地発掘調査概要-
広島県立歴史民俗資料館	古墳誕生の謎をさぐる　-特殊器台からはにわへ-、年報　第16号　-平成6(1994)年度-、弥生のかたち　-土器が語る弥生時代のひろしま-、歴風ニュース　第12号・13号
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ、草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ
広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会	広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報　Ⅻ
【山口県　35】	
下関市教育委員会	武久西原遺跡、松ヶ坪遺跡
小野田市歴史民俗資料館	カメラの歴史展、貨幣展、夾嶋又兵衛とその周辺
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅻ
【徳島県　36】	
(財) 徳島県埋蔵文化財センター	センター　要覧
徳島市教育委員会	阿波を掘る、徳島市埋蔵文化財発掘調査概要　5
【香川県　37】	
(財) 香川県埋蔵文化財調査センター	いにしえの讃岐　第9～12号、空港跡地遺跡発掘調査概報　-平成6年度-、県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　-平成6年度-、高松城跡、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要　Ⅲ、讃岐　-あゆみ・わざ・ちえ-、前田東・中村遺跡、多肥松林遺跡、鹿伏・中所遺跡、太田下・須川遺跡、平池南遺跡、六条・上所遺跡、上天神遺跡、国分寺楠井遺跡、綾南奥下池南遺跡、飯野・東二瓦礫遺跡、川津下樋遺跡、川西北・七条Ⅱ遺跡　川西北・鍛冶屋遺跡
大野原町教育委員会	角塚
【愛媛県　38】	
(財) 松山市生涯学習振興財団	松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅶ　-平成6年度-、古照遺跡　-第10・11次調査-、大峰ヶ台遺跡　-第4次調査-、福音小学校校内遺跡　-弥生時代編-、辻町遺跡　-2次調査地-

伊予三島市教育委員会	端華の森古墳、長田箱式石棺
大西町教育委員会	館報おおにし　No.97
【高知県　39】	
(財) 高知県文化財団	研究紀要　第1号、高知県埋蔵文化財センター年報　2　-1992年度-、高知県埋蔵文化財センター年報　3　-1993年度-、稗地遺跡、峰の上遺跡、下分遠崎遺跡、浦戸城跡、後川・中筋課川埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅲ、小籠遺跡Ⅰ、扇城跡、船戸遺跡、具同中山遺跡群　Ⅰ
佐川町教育委員会	岩井口遺跡・二ノ部遺跡・二ノ部城跡、岩井口遺跡Ⅱ
野市町教育委員会	野市町本村遺跡調査報告書
【福岡県　40】	
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報　第13号　-平成5年度-
久留米市埋蔵文化財センター	筑後国府跡、大善寺北部地区遺跡群Ⅳ、上津・藤光遺跡群Ⅰ、日渡遺跡、上津・藤光遺跡群、安武地区遺跡群Ⅷ、東部地区埋蔵文化財調査報告書　第13集、筑後国府跡、ヘボノ木遺跡、神道遺跡、大善寺北部地区遺跡群Ⅲ、野中三十六遺跡、津福西小路遺跡、久留米城外郭、平成6年度久留米市内遺跡群、ヘボノ木遺跡　平成6年度発掘調査概要、安武地区遺跡群Ⅸ
福岡市教育委員会	福岡市埋蔵文化財年報　Vol. 8、福岡城月見櫓、志賀島・玄海島、博多　43、博多　44、博多　45、博多　46、博多　47、博多　48、那珂遺跡　13、那珂14、東那珂遺跡　1、比恵遺跡群（15）、比恵遺跡群（16）、比恵遺跡群（17）、比恵遺跡群（18）、堅粕　2、雀居遺跡　2、雀居遺跡　3、席田青木遺跡　2、中南部（4）、板付遺跡、井尻Ｂ遺跡　2　-第3次調査報告-、井尻Ｂ遺跡　3　-第4次調査報告-、野多目台、警弥郷Ｂ遺跡　2　-第3次調査の報告-、福岡城跡　-第23次調査報告-、鴻ろ館跡　5、長尾遺跡、四箇遺跡25次調査・熊本遺跡2次調査、藤崎遺跡　10、クエゾノ遺跡、東入部遺跡群　4、四箇船石　1、田村遺跡　Ⅺ、入部　Ⅴ、小笠木、有田・小田部　第21集、有田・小田部　第22集、四箇周辺遺跡群（6）、周船寺遺跡群、大原Ａ遺跡　1、大原Ａ遺跡　2、桑原遺跡群　-第1次調査-、大原Ｃ遺跡　1、都地遺跡（4）、飯氏二塚古墳、徳永古墳群3・女原上ノ谷製鉄址、吉武遺跡群　Ⅶ、野方久保遺跡3　-第4次調査-、史跡　板付遺跡　環境整備報告、飯倉Ｄ遺跡
北九州市教育委員会	中谷遺跡、堺町遺跡第二地点、高津尾遺跡　Ⅲ、下貫遺跡（第2次）、小倉城跡1、岡遺跡Ⅲ区
鞍手町教育委員会	伊藤家家事雑記、岩河内遺跡、古門松ヶ元古墳群
北九州市立考古博物館	弥生の鉄文化とその世界　-北九州の先進性を探る-
九州歴史資料館	九州歴史資料館年報　-平成6年度-、九歴だより　No.1・No.2
吉井町立歴史民俗資料館	郷土吉井　創刊号
九州大学埋蔵文化財調査室	九州大学埋蔵文化財調査報告　第四冊　-図版編-
【佐賀県　41】	
鎮西町教育委員会	畦木場遺跡・平尾野遺跡・石川三長陣跡・福原長尭陣跡、名護屋城跡周辺遺跡
【熊本県　43】	
下関市教育委員会	肥後古代の森
【大分県　44】	
犬飼町教育委員会	高松遺跡、上津尾遺跡
香々地町教育委員会	香々地町の遺跡　Ⅰ
別府大学付属博物館	橋津組大庄屋日記（三）、別府大学付属博物館展示資料図録　1995、牟礼越遺跡
【宮崎県　45】	
高岡町教育委員会	橋上遺跡、高岡町内遺跡Ⅲ
【鹿児島県　46】	
鹿児島県立埋蔵文化財センター	埋文だより　第7号、平松城跡、本御内遺跡、飯盛ヶ岡遺跡、針原遺跡、西丸

	尾B遺跡
鹿児島県教育委員会	北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅳ）、鹿児島サン・オーシャン・リゾート地域埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）
伊仙町教育委員会	天城遺跡・下島権遺跡
【沖縄県　47】	
沖縄市立郷土博物館	古代の沖縄市、室川貝塚

Ⅵ 付 編

倉敷埋蔵文化財センター情報誌
「ほるほる」

倉敷埋蔵文化財センター情報誌
HORU-HORU ほるほる
第3巻 第1号 / 発行 1996年 1月 8日
王子が岳南麓遺跡発掘調査成果展だ！号
編集 倉敷埋蔵文化財センター 〒712 倉敷市福田町古新田940番地 TEL 086-454-0600

◎王子が岳南麓遺跡を調べた理由◎

王子が岳南麓遺跡は児島唐琴の王子が岳の山の麓にありました。ここで発掘することになったのは、健康保険保養所「瀬戸内荘」を大きく建てなおすために、遺跡*1のある所で工事をしないといけなくなったからです。工事で地面の下を掘りかえすと遺跡は壊れてしまいます。工事で壊れる遺跡は調査して記録しておかないといけません。

調査の結果、いろんなことがわかりました。では、わかったことを順番にみていくことにしましょう。

◎どんなものがみつかったか◎

みつかったもの（遺物*2）のなかで、いちばん古いものは、旧石器時代の石の道具（石器）です。これらは、だいたい2万5千年昔のものです。また、縄文時代の石器や土器もみつかっています。これらは、9千年ぐらい昔のものです。そのほか、弥生時代や古墳時代の土器もすこしだけみつかっています。石器は全部で760点ほど、土器は小さなかけらまで数えると400点ほどがみつかっています。次は、これらの遺物について、くわしくみてみましょう。

*1 遺跡（いせき） 昔の人がのこした家のあとや墓のあと（遺構）と、そこにのこされた品物（遺物）をあわせたもの。（遺構は地面につくられていて動かせない部分）

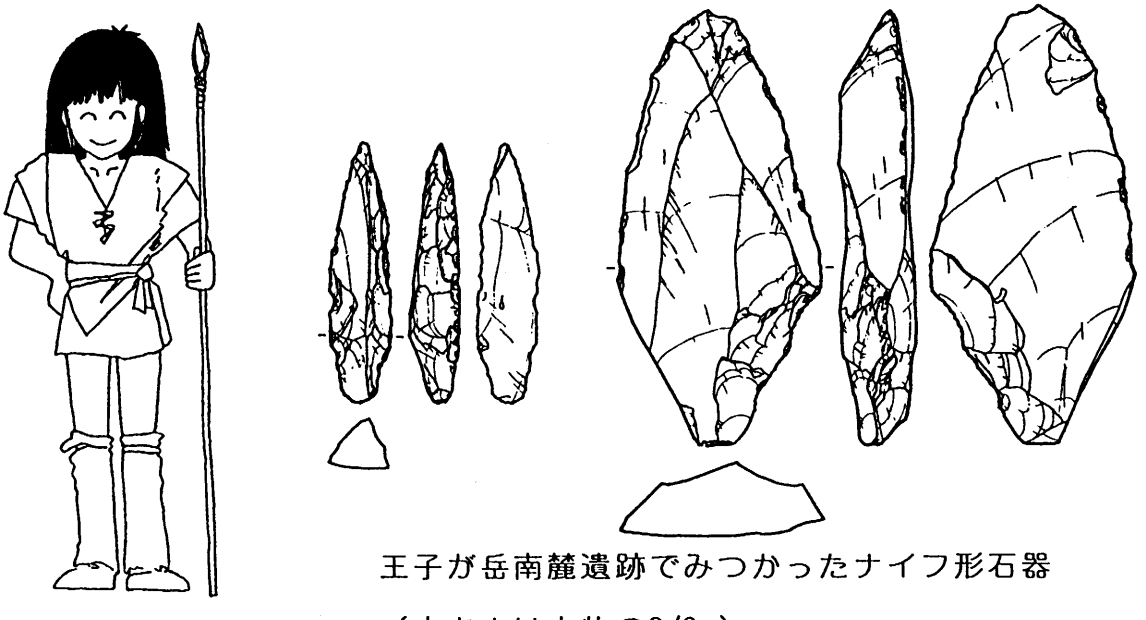
*2 遺物（いぶつ） 昔の人がのこした道具、食べたもののカスなど、人の手がくわわったもので、もちはこびができるもの。

◎石器ってどんなもの？　1／旧石器時代の石器◎

みつかった石器のほとんどが、旧石器時代のものでした。そのうち1／10ぐらいがきちんと道具の形になったものです。残りは道具を作るときにできたかけら（剥片）や作りかけのもの、石器の材料になる石をとった残りの石（石核）などでした。王子が岳南麓遺跡では、四国でとれるサヌカイトという石を石器の材料にしています。

道具になったもののうちの14点は、ナイフ形石器と呼ばれるものでした。これは、槍の先につけたり、動物の革を剥ぐのに使ったりした古代の万能の刃物です。図1のように、きちんときまった順番に石を割って作る石器です。この作り方のきまりを瀬戸内技法といいます。この技法での石器作りは、現在の瀬戸内海のあたりを中心にして行われていました。

2万5千年昔の人たちは、このように順序だった考え方をして石器を作っていました。このことから、彼らが無駄のない洗練された技術を生みだすことのできる知恵の持ち主であったことがわかります。



王子が岳南麓遺跡でみつかったナイフ形石器

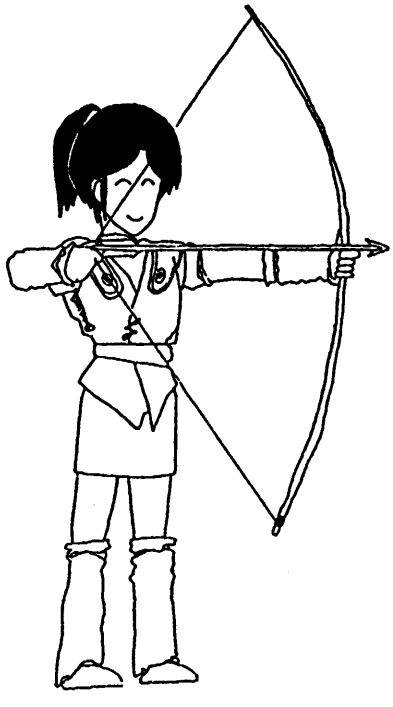
（大きさは本物の2/3 ）

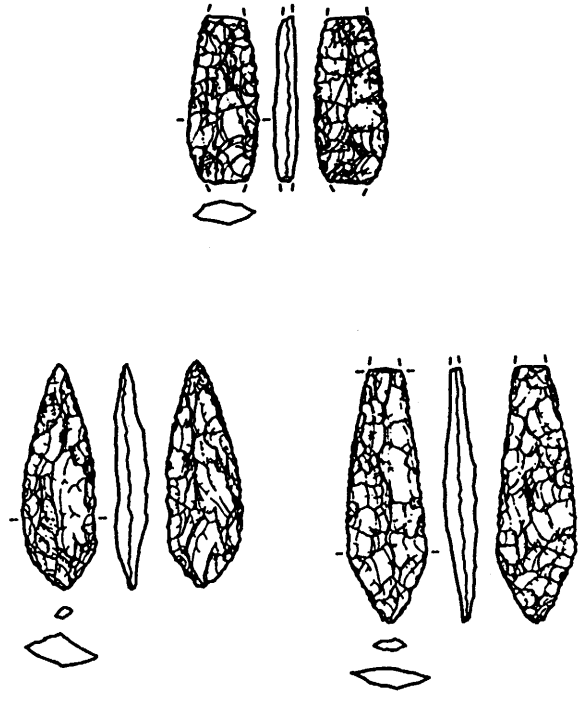
◎石器ってどんなもの？　2／縄文時代の石器◎

有茎尖頭器という石器が３点みつかっています。これは縄文時代のはじめのころ（１万２千年ほど昔）に槍の先につかわれた石器です。そのうちのひとつは、黒曜石でつくられていました。

また、石の斧もみつかっています。神子柴型石斧と呼ばれるタイプのものです。凝灰岩を加工したもので、刃のところを部分的に磨いてとがらせています。これも縄文時代のはじめごろの石器です。

縄文時代には、弓矢もつかいはじめたので、石で作った矢の先（鏃）もつくられています。





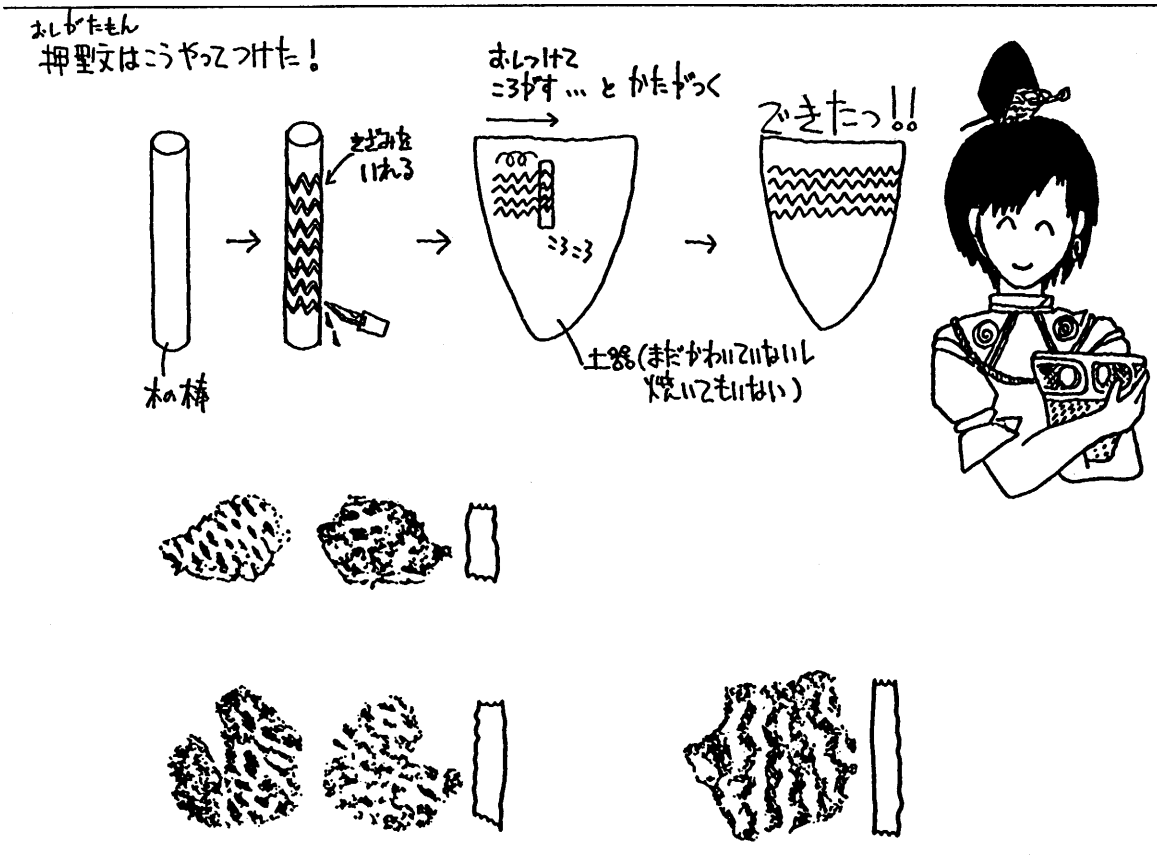
王子が岳南麓遺跡でみつかった有茎尖頭器
（大きさは本物の2/3 ）

◎押型文土器ってどんなもの？◎

日本で最初に土器がつくられたのは、１万２千年ほど昔のことです。今回の調査では、９千年ほど昔に作られた縄文時代の土器がみつかっています。

押型文土器と呼ばれる土器です。粘土の上に文様を彫刻した棒をころがして文様をつけています。

土器の発見は、人々の生活をずいぶんと便利にしました。食べ物を煮たり炊いたりできるようになり、食べられるものが増えました。木の実などをためておくこともできるようになりました。



王子が岳南麓遺跡でみつかった縄文土器

（大きさは本物の1/2 ）

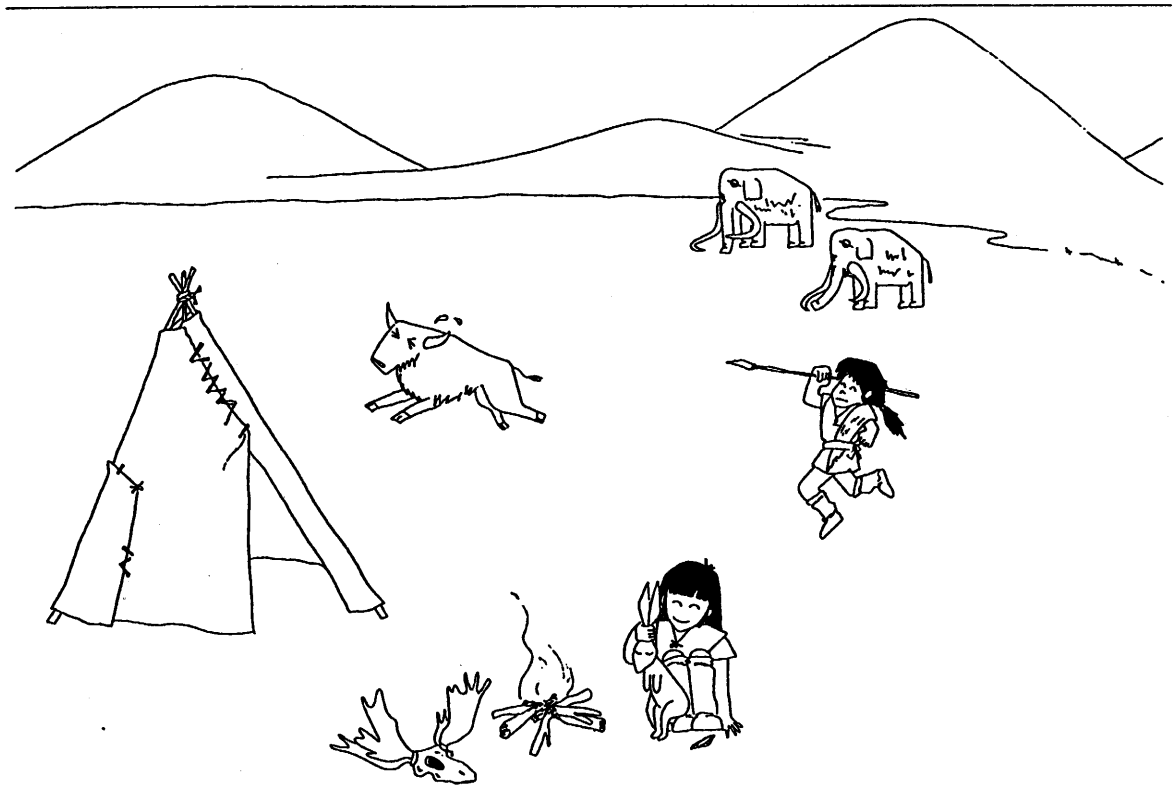
◎旧石器時代の人たちはどんな生活をしていたか？◎

さて、旧石器時代の人たちはどんな生活をしていたのでしょうか？

とても昔のことなので、てがかりはあまりのこっていません。ですので、くわしいことはわかっておりませんが、当時の生活をちょっとのぞいて見てみましょう。

まず、自然環境の様子はどうだったのでしょう。今の瀬戸内海は陸で、このころは草原だったといわれています。オオツノジカやナウマンゾウなど、今とは違った動物たちがいました。

人びとはまだ、お米を作ったり、野菜を作ったりすることは知りませんでした。木の実を採ったり、獣をとらえたりして食べ物を手にいれていました。住むところはきまっておらず、テントのような家をもち、獣を追いかけて旅していたといわれています。



埋蔵文化財センターって何するところ？

昔からたくさんの人が住んでいた倉敷には、いままでに知られているだけでも、１０００以上の遺跡があります。

埋蔵文化財センターは、これらの遺跡をまもり未来にのこすための仕事をしています。たとえば建物や道の工事をする場所に遺跡があるかどうかをしらべ、遺跡があるときには工事の場所をかえてもらったり、どうしても工事場所をかえられないときには、その遺跡を発掘してくわしくしらべて記録する仕事があります。

発掘で出てきた土器などは、きれいにあらって整理してやらないといけません。どろだらけのままでは研究できないからです。

また、発掘でわかったことをみなさんに知らせる仕事もしています。展示や講座、報告書という本を作る事などは、そのための仕事です。

さらに、発掘で見つかった土器などをしまっておくのも埋蔵文化財センターの大切な仕事です。コンテナ１３００箱ほどの遺物が収蔵庫にしまわれています。

仕事を
難しい言葉でいうと
こうなるぞ
⇩

⇨開発協議

⇨発掘調査

⇨整理作業
⇨研究

⇨報告書づくり
⇨講座・展示

⇨収蔵

倉敷埋蔵文化財センター年報3
ー平成7(1995)年度ー

平成8年11月30日　印刷発行

編集・発行
倉敷埋蔵文化財センター
〒712　岡山県倉敷市福田町古新田940番地
TEL 086-454-0600

印　刷
(株) ササベ印刷

The Annual Report
Of
Kurashiki Archaeological Center

Volume 3 1995

Kurashiki
Archaeological Center

November 1996